

大阪市平野区

長原遺跡東部地区発掘調査報告

X

2004年度大阪市長吉東部地区

土地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書

2007.3

財団法人 大阪市文化財協会

長原遺跡東部地区発掘調査報告 X

2007.3

本報告書で報告する遺構は、溝・土壕など弥生時代の遺構群、畠の可能性のある古墳時代の溝群、奈良時代の流路などである。遺物は奈良時代の流路から人面黒面土器が出土したほか、古墳時代後期～飛鳥時代の土器群、弥生時代の甕や甗・高杯などが出土した。

また、飛鳥～奈良時代の地層から「十五束」と書かれた木簡の削り屑が出土した。この資料は周辺に広がる耕作地とともに、律令期畿内の農村の様相をうかがうための貴重な手がかりといえる。

そのほか、主に飛鳥・奈良時代の流路から出土した動物骨の分析を掲載する。

大阪市平野区

長原遺跡東部地区発掘調査報告

X

2004年度大阪市長吉東部地区

土地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書

2007.3

財団法人 大阪市文化財協会



飛鳥・奈良時代の土器

大阪市平野区

長原遺跡東部地区発掘調査報告

X

2004年度大阪市長吉東部地区

土地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書

2007.3

財団法人 大阪市文化財協会

序 文

本書は、2004年度に行った大阪市長吉東部地区土地区画整理事業に伴う発掘調査の成果をまとめたものである。

今回の調査では、弥生時代の集落、古墳時代の溝群、古代の流路、中世の水田が見つかった。集落から自然の川になり、それが埋まって水田が営まれるというように、調査地が大きく変化してきたことが明らかとなった。

また、「東」の字を記した木簡の削り屑が発見された。長原遺跡で木簡の削り屑が出土したことはこれが初めてであり、墨痕が土に転写されているという珍しい出土状況であった。律令期の官吏が現地で文字記録を行っている姿を思い起こさせる貴重な遺物である。

最後に、発掘調査ならびに報告書刊行に当ってご尽力を賜った、大阪市建設局、地元住民の皆様をはじめとする関係者各位に心より感謝の意を表したい。

2007年3月

財団法人 大阪市文化財協会

理事長 脇 田 修

例 言

- 一、本書は財団法人大阪市文化財協会が2004年度に実施した、大阪市建設局長吉東部土地区画整理事務所による平野区長吉出戸8丁目(NG04-3次、NGは長原遺跡を示す)の土地区画整理事業に伴う発掘調査の報告書である。
- 一、発掘調査は、財団法人大阪市文化財協会調査課長田中清美(当時、現技術管理・保存科学担当課長)の指揮のもと、調査課杉本厚典(当時、現文化財研究部)が行った。調査の面積・期間などは第Ⅰ章第2節表2に示した。
- 一、本書の編集は、事業企画担当課長京嶋寛及び長原調査事務所長松尾信裕の指揮のもと、杉本が行った。執筆は第Ⅲ章第1節を除いて杉本が担当した。
- 一、発掘調査と報告書作成の費用は、大阪市建設局が負担した。
- 一、第Ⅲ章第1節に収録した動物骨同定は、独立行政法人大阪市立大学大学院医学研究科器官構築形態学(第2解剖)安部みき子・柴田佳奈の両氏より王稿を賜った。
- 一、本調査の基準点測量はアジア航測株式会社に委託した。
- 一、本書で使用した遺構写真は調査担当者が撮影した。また、遺物写真は阿南写真工房が撮影した。
- 一、発掘調査で得られた遺物・図面・写真などの資料はすべて大阪市文化財協会が保管している。
- 一、発掘調査から本書の作成に係わる作業には補助員諸氏の協力を得た。深く感謝の意を表したい。

凡 例

1. 本書で用いた層位学・堆積学的用語については、[趙哲済1995]に準じる。また、本書における地層名は、調査現場における層序を用いている。なお、「長原遺跡東北地区の基本層序」(六反層序と通称する)との対比は[村元健一2003a]、「長原遺跡標準層序」(長原層序と通称する)との対比は[趙哲済2001]に基づき行っており(別表1・2)、本文中では六反層序の表記には「RK」を冠し、長原層序の表記には「NG」を冠している。
2. 本書における遺構名の表記には、建物にSB、柱穴にSP、土壇にSK、畦畔にSR、溝にSD、自然流路にNR、その他のものはSXをそれぞれ冠している。遺構番号は溝群など例外を除いて3桁の数字で表し、最初の数字は原則として遺構の属する現場層序の地層番号を付している。一例をあげれば、第7層層準の溝は「SD7〇〇」となる。
3. 遺物には本書での通し番号を付している。ただし、動物遺体については遺物取上げ時の登録番号(R番号)を使用している。
4. 水準点はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、本文中では「TP±〇m」と記した。また、座標値は「世界測地系」に基づく。
5. 本書で用いた地層の土色は[小山正忠・竹原秀雄1996]の新版標準土色帖に従った。
6. 本書で用いた土器編年と器種名については次の文献に拠った。本文中では煩雑を避けるため、これら引用文献をその都度提示することは制愛している。弥生土器：[寺沢薫・森井貞雄1989]、古墳時代の須恵器：[田辺昭三1981]、飛鳥・奈良時代の土器：[古代の土器研究会1992]、平安時代の土器：[佐藤隆1992]、瓦器：[鈴木秀典1982]。

本文目次

序文

例言

凡例

第Ⅰ章 長原遺跡東北地区の発掘調査	1
第1節 調査の経緯と調査地の位置	1
1) 長原遺跡の位置	1
2) 既往の調査	2
第2節 発掘調査の経過と概要	6
第Ⅱ章 調査の結果	7
第1節 NG04-3次調査	7
1) 基本層序と出土遺物	7
i) 基本層序	ii) 各層出土の遺物
2) 遺構と出土遺物	14
i) 弥生時代の遺構と遺物	ii) 古墳時代の遺構と遺物
iii) 古墳時代後期～奈良時代の遺構と遺物	iv) 奈良～平安時代の遺構と遺物
v) 中世の遺構と遺物	vi) 中世後半期～近世の遺構と遺物
3) まとめ	37
第Ⅲ章 遺構と遺物の検討	39
第1節 NG04-3次調査地出土の動物骨同定	39
1) はじめに	39
2) 出土動物骨の同定	39
第2節 長原遺跡東北地区における歴史・地理的環境とNG04-3次調査地における土地利用の変化	42
1) はじめに	42
2) 弥生時代中期	42
3) 古墳時代中期	45
4) 飛鳥～奈良時代	45
引用・参考文献	55
あとがき・索引	
英文目次・要旨	
報告書抄録	

原色図版目次

1 飛鳥・奈良時代の土器

図版目次

- 1 地層断面(一)
 - 上：調査区西部第3b～4c層(東北東から)
 - 中：調査区西部南壁第3b～4c層(北東から)
 - 下：調査区東部南壁第4a～c層(北西から)
- 2 地層断面(二)
 - 上：調査区東部第4c～6aix層(北西から)
 - 中：調査区東壁第6ai～6d層(西から)
 - 下：調査区西壁第8a・b層に貫入する墳砂(東から)
- 3 弥生時代の遺構(一)
 - 上：第8層の遺構(東から)
 - 下：第8層の遺構(東南東から)
- 4 弥生時代の遺構(二)
 - 上：SD803(北東から)
 - 中：SD803断面(南西から)
 - 下：SD802断面(南東から)
- 5 弥生時代の遺構(三)
 - 上：SK804(南東から)
 - 中：SK805・806(南東から)
 - 下：SK803(北から)
- 6 弥生時代の遺構(四)
 - 上：SD804・805(南西から)
 - 中：SD805遺物出土状況(南から)
 - 下：土器集積(北から)
- 7 古墳時代の遺構(一)
 - 上：SD7b17検出状況(北から)
 - 中：SD7b13検出状況(北から)
 - 下：SD7b18・7b19検出状況(北北西から)
- 8 古墳時代の遺構(二)
 - 上：第7b層上面の溝群(東から)
 - 下：SD7b22・7b23完掘状況(北から)
- 9 古墳時代の遺構(三)
 - 上左：SD7a03検出状況(西から)
 - 上右：SD7a03完掘状況(西から)
 - 下：NR701(東南東から)
- 10 古墳時代の遺構(四)
 - 上：SD7a01～7a03(東から)
 - 下：SD7a03(北から)
- 11 古墳～飛鳥時代の遺構
 - 上：NR701(第7a層)～第6biii層遺物出土状況(南から)
 - 中：SD605(北西から)
 - 下：SD603上面土器出土状況(北東から)
- 12 飛鳥～奈良時代の遺構(一)
 - 上：NR601遺物出土状況(西から)
 - 下：NR601断面(北西から)
- 13 飛鳥～奈良時代の遺構(二)
 - 上：NR601動物骨出土状況(北から)
 - 下：NR601杭出土状況(北東から)
- 14 奈良時代の遺構(一)
 - 上：NR501(東から)
 - 下：NR501断面(北西から)
- 15 奈良時代の遺構(二)
 - 上：NR501動物骨出土状況(北から)
 - 中：NR501遺物出土状況(南西から)
 - 下：NR501遺物出土状況(北から)
- 16 奈良時代の遺構(三)
 - 上：SD601検出状況(南東から)
 - 中：SD601断面(南東から)
 - 下：SD601完掘状況(北西から)
- 17 奈良～平安時代の遺構
 - 上：SD501・SK501・502・SP501(南から)
 - 中：SD501断面(南東から)
 - 下：SD501遺物出土状況(北東から)
- 18 中世の遺構(一)
 - 上：第4c層の遺構(東から)
 - 下：SR401と水田面(東から)
- 19 中世の遺構(二)
 - 上：SR401(北から)
 - 下：SR401と水田面(東から)
- 20 中世の遺構(三)
 - 上：SR401断面(南から)
 - 中：SR402断面(北から)
 - 下：SR401東側の水田面(第4ci層上面)検出踏込み(北西から)
- 21 中～近世の遺構
 - 上：鳥島溝1～3(東から)
 - 下：SK301・302(南から)
- 22 各層出土の遺物
- 23 各層出土・弥生時代の遺構出土遺物
- 24 弥生時代の遺構出土遺物
- 25 古墳～奈良時代の遺構出土遺物
- 26 飛鳥時代の遺構出土遺物
- 27 飛鳥～奈良時代の遺構出土遺物
- 28 奈良時代・近世の遺構出土遺物
- 29 動物遺存体(一)
- 30 動物遺存体(二)

挿 図 目 次

図1	長原遺跡の地区割と周辺の遺跡	1	図19	NR601平面図、SD601平面・断面図	26
図2	調査地周辺の既往の調査	4	図20	SD603～605出土遺物	27
図3	NG04-3次調査地位置	6	図21	NR601出土遺物	29
図4	NG04-3次調査南壁(東半)地層断面	8	図22	NR501平面図	31
図5	NG04-3次調査南壁(西半)地層断面	9	図23	NR501東側における遺物出土状況	31
図6	各層出土遺物	12	図24	NR501出土遺物	32
図7	第6b層出土木簡削屑	13	図25	第5a層上面の遺構平面・断面図	33
図8	第8層の遺構平面図	14	図26	SD501出土の曲刀鏃	33
図9	第8層の遺構断面図	15	図27	各層検出遺構平面図	34
図10	土器集積平面・立面図、SK803平面・断面図、SD805平面・立面図	17	図28	第4c層上面の遺構断面図	35
図11	第7b層下部～8a層上部遺物出土状況	18	図29	鳥島溝出土遺物	36
図12	第8a層の遺構出土遺物	20	図30	弥生時代中期のNG04-3・NG02-1次調査地	42
図13	第7a・b層上面の遺構平面図	22	図31	弥生時代中期の長原遺跡東北地区西半の遺構分布図	43
図14	第7b層上面の溝群断面図	22	図32	古墳時代中期の長原遺跡東北地区西半の遺構分布図	46
図15	第7a層上面の遺構断面図	23	図33	飛鳥～奈良時代の流路	47
図16	SD603～605平面図	24	図34	飛鳥～奈良時代の長原遺跡東部地区の遺構分布図	49
図17	SD603～605断面図	25			
図18	SD603上面土器出土状況平面・立面図	25			

表 目 次

表1	長原遺跡東北地区における主な調査	5	表4	NG04-3次調査地時代別ウシ・ウマ骨数量	40
表2	2004年度発掘調査の期間など	6	表5	NG04-3次調査地出土動物遺存体一覧表	41
表3	NG04-3次調査地の層序	10			
			別表1	長原遺跡東北地区の基本層序	52・53
			別表2	長原遺跡の標準層序	54

第 I 章 長原遺跡東北地区の発掘調査

第1節 調査の経緯と調査地の位置

1) 長原遺跡の位置

長原遺跡は大阪市平野区長吉長原・長原東・長原西・出戸・川辺・六反に所在する、後期旧石器時代から近世にかけての複合遺跡である。1974年に地下鉄谷町線延長工事に伴う試掘調査で発見されて以降、長原遺跡調査会・大阪府教育委員会・財団法人大阪文化財センター・財団法人大阪市文化財協会によって発掘調査が行われており、東西約2km、南北約2kmの範囲に遺跡が拡がることが明らかになっている。現在、長原遺跡は8つの地区に区分され、それぞれ北・東北・東・東南・中央・南・

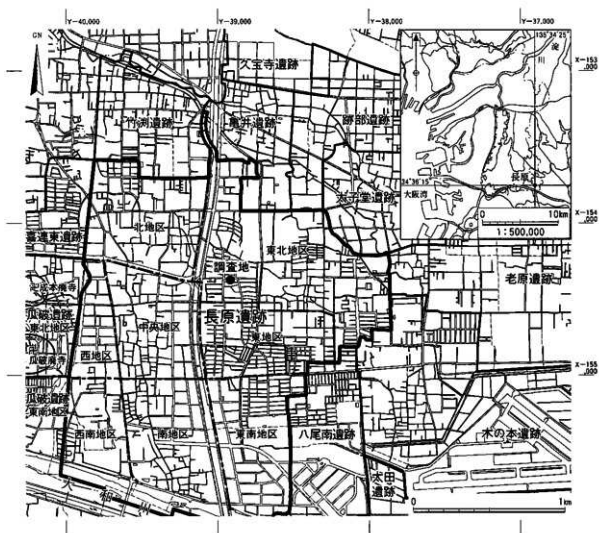


図1 長原遺跡の地区制と周辺の遺跡

西・西南地区と呼称している(図1)。

本書で報告するNG04-3次調査が行われた長吉出戸8丁目は、長原遺跡の東北地区に位置する。東北地区の北と東は八尾市との市境であり、北側で亀井・跡部遺跡、東側で木の本・老原・太子堂遺跡に接する。長原遺跡の中で東北地区は低位段丘層以下が最も地中深くに埋没し、その上に沖積層が厚く堆積した地域である。しかし、本調査地は長原遺跡中央・東地区に近く、東北地区の中では低位段丘層が検出される標高は比較的高い。

2) 既往の調査

長原遺跡東北地区の調査は、1978～85年にかけての飛行場幹線特殊マンホール建設および近畿自動車道松原天理線建設工事に伴い、城山遺跡の名称で実施された。その後、長原遺跡の一部として、大阪市の下水道工事、電力管埋設工事などに伴う小規模な調査が行われた。そして長吉東部土地区画整理事業施行に伴い長原遺跡東北地区がその対象地域となった1995年度以降、毎年発掘調査が継続して実施されている(図2・表1)。

初年度である1995年度には、都市計画道路長吉東部1号線予定地の北端部で1箇所の調査を実施し(NG95-57次)、厚い洪水堆積層で埋まった古墳時代後期の橋とみられる土手状遺構や流路、飛鳥時代および平安時代の掘立柱建物などを検出した。

1996年度には、前年度の調査地の南側の長さ42m部分を対象に調査を実施し(NG96-9次)、弥生時代後期から古墳時代初頭の水田、飛鳥時代の掘立柱建物などを検出した。また、当年度には大正川の西側に沿う都市計画道路長吉東部3号線予定地も調査の対象となり、大阪市建設局長吉東部土地区画整理事務所ならびに大阪市教育委員会文化財保護課の立会のもと、2箇所の試掘調査を行った。その試掘調査の結果、古墳時代後期の厚い洪水堆積層が確認されたため、その下に存在する古墳時代以前の遺構面の調査を目的として、現地表下4mまでを調査の対象とすることとなった。この協議の結果を受けて、長吉東部2号線との交差点の北側に当る部分で2箇所の調査を行った(NG96-40・66次)。調査では弥生時代後期の水田、古墳時代後期から飛鳥時代の掘立柱建物、平安時代の遺構群が検出された。

1997年度には、都市計画道路長吉東部2号線予定地で3箇所(NG97-12・13・52次)、同長吉東部3号線予定地で1箇所(NG97-43次)、同敷津長吉線予定地で1箇所(NG97-56次)の合計5箇所で調査を実施した。NG97-12・52次調査地では、旧石器時代の石器製作址、縄文時代中期以前の流路、縄文時代中期～弥生時代前期の溝・土壌、弥生時代中期の水田、弥生時代後期～古墳時代前期の土壌・ピット、古墳時代中～後期の土手状遺構、掘立柱建物を含む飛鳥時代および平安時代の遺構群などが検出された。旧石器時代の石器製作址からは、14,000点に及ぶ剥片とともに、約50点のナイフ形石器や削器などが出土しており、後期旧石器時代の石器製作技法を検討する上で重要な資料として注目されている。

1998年度には、都市計画道路敷津長吉線予定地で2箇所の調査を実施し(NG98-19・20次)、古墳時代中期の流路と盛土遺構を検出し、盛土遺構とその周辺から祭祀に伴うと考えられる滑石製勾玉・

白玉、土製勾玉や多量の土器が出土した。

1999年度には、都市計画道路数津長吉線予定地で2個所の調査を実施し(NG99-19・41次)、NG99-41次調査地では縄文時代早期の土器集中部、縄文時代中期の土壌が、NG99-19次調査地では縄文時代後期の跡跡と土器集積、古墳時代から弥生時代の水田、古代から近世にかけての水田や動植物群などを検出した。

2000年度には、都市計画道路数津長吉線予定地の東端で、1個所の調査を実施した(NG00-6次)。東隣のNG98-20次調査地で確認されたものと一連の古墳時代中期の盛土のほか、平安時代の流路が検出された。また、遺構に伴うものではないが、重弧文軒平瓦をはじめとする古代の瓦や和同開珎などの銅銭が出土した。

2001年度に実施された都市計画道路数津長吉線予定地における調査(NG01-14次)は、本書で報告するNG04-3次調査地の30m東に位置する。古墳時代中期および平安時代後期の水田、古墳時代後期から奈良時代にかけての流路が検出され、奈良時代の流路からは人面墨画土器・ミニチュア土器などの祭祀遺物や、ウシ・ウマの骨が大量に出土した。とりわけ大量の人面墨画土器は、共存する遺物から8世紀前半の年代が与えられており、この祭祀形態の早い段階の資料として重要である。

2002年度には都市計画道路数津長吉線予定地、都市計画道路長吉東部2号線予定地でそれぞれ1個所の調査がなされた(NG02-1・5次)。NG02-1次調査地では、弥生時代中期の住居跡・井戸、古墳時代の溝群、飛鳥・奈良時代の流路などが検出された。飛鳥・奈良時代の流路からは人面墨画土器の破片や和同開珎が出土しており、NG01-14次調査地の奈良時代の流路と一連のものとみられる。また、NG02-5次調査地では弥生時代前期から中期初頭、古墳時代前期の水田がそれぞれ見つかった。とりわけ弥生時代前期から中期初頭の水田は、長原遺跡東北地区の中では最も古い時期の水田であり、付近のNG97-52次調査地でも検出されていることから、この地域一帯に広がっている可能性が高い。

2003年度の調査は都市計画道路長吉東部2号線予定地で1個所の調査がなされた(NG03-9次)。NG97-13・43次調査地で見つかった古墳時代中・後期の流路の続きが検出され、この流路の埋没した上位には平安時代の井戸などが股けられていた。

以上の調査については、それぞれ次年度に整理作業を行い、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅰ～Ⅸを刊行し、調査成果を公表している。

一方、同土地区画整理事業に伴う調査以外に、本書で報告するNG04-3次調査地の北側では、NG83-1・03-5次調査が行われている[大阪市文化財協会1984a・2004c]。NG83-1次調査地はNG04-3次調査地の80m北に位置し、弥生時代前期のビット群、弥生時代中期の住居とみられる方形遺構、古墳時代中期の柱穴を含むビット群などが検出された。

NG03-5次調査地はNG04-3次調査地の20m北に位置し、弥生時代中期の方形周溝墓2基、古墳時代中期の溝、古墳時代後期の溝群、飛鳥時代から奈良時代前半の流路などが検出された。中でも古墳時代中期の木棺墓からは人骨ではなくウマの歯が出土しており、ウマの埋葬として注目されている[辻美紀2005]。

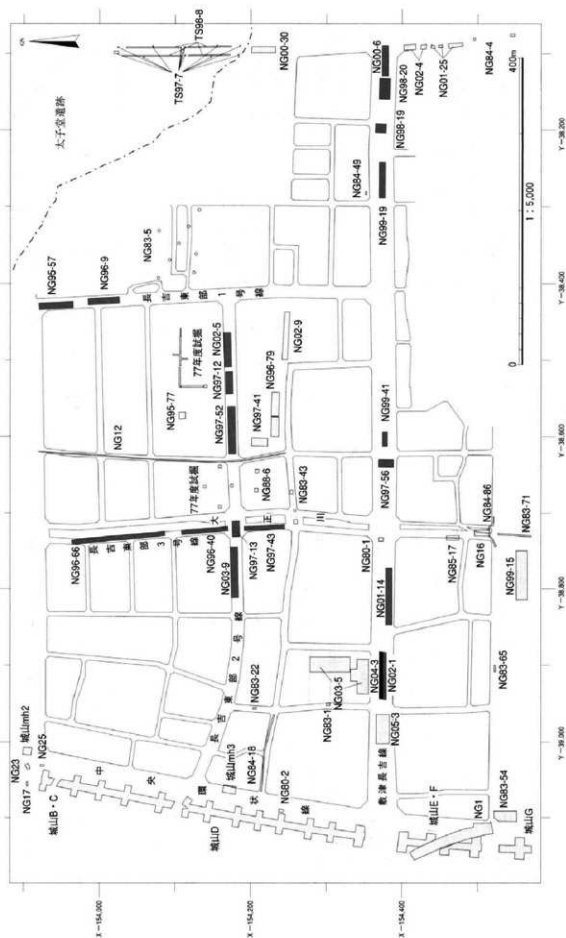


表1 長原道路東北地区における主な調査

調査	おもな内容	文 献
城山mh2	弥生時代前～中期清高状遺構、古墳	大阪文化財センター1980
城山mh3	弥生時代中期遺物、古墳時代大溝、奈良時代遺物	大阪文化財センター1980
城山B・C区	弥生時代中期方形周溝墓、古墳、飛鳥時代自然流路	大阪文化財センター1986a
城山D・E・F区	弥生時代中・後期集落、古墳時代中期水田・土壇、飛鳥～平安時代溝、中世水田	大阪文化財センター1986b
城山G区	弥生時代土壇群、飛鳥時代～中世水田	大阪文化財センター1986c
NG1	弥生時代中期溝、土壇墓、古墳時代中期溝、飛鳥時代大溝	大阪市文化財協会1978
77年度試掘	奈良時代溝	大阪市教育委員会・藤波宮並 顕彰会1978
NG12	飛鳥時代枕列・流路・土器溝まり、平安時代土壇	大阪市文化財協会1979a
NG16	弥生～古墳時代中期遺物、弥生時代溝、古墳時代前～中期溝・井戸	大阪市文化財協会1979b
NG17	縄文時代晩期・弥生・古墳時代後期遺物	大阪市文化財協会1979c
NG80-1	TP+7.2mで弥生時代溝、TP+6.9mで砂層(NG8層)	大阪市文化財協会1981a・2006c
NG80-2	弥生・古墳時代遺物	大阪市文化財協会1981b・2006c
NG23	弥生時代中期遺物、古墳	大阪市文化財協会1980・2006c
NG25	縄文時代晩期・弥生時代中期遺物	大阪市文化財協会1980・2006c
NG83-1	弥生時代中期住居、古墳時代中期住居	大阪市文化財協会1984a
NG83-5	TP+4.8mで砂層(NG8層)	大阪市文化財協会1984b・2006c
NG83-22	TP+7.5mで奈良時代包含層	大阪市文化財協会1984c
NG83-43	TP+7.8mで砂層(NG5層)	大阪市文化財協会1984d
NG83-54	TP+8.1mで砂層(NG5層か)	大阪市文化財協会1984e
NG83-63	弥生時代中期集落、弥生時代後期土器棺墓	大阪市文化財協会1984f
NG83-65	弥生時代中期遺物、古墳時代中期土壇状遺構	大阪市文化財協会1984g・2006c
NG84-4	古墳時代中期溝、土壇、飛鳥時代水田、古墳時代砂層なし	大阪市文化財協会1985a・2006c
NG84-18	TP+8.2mで鹿賀土器	大阪市文化財協会1985b・2006c
NG84-49	TP+7.3mで程松砂層(NG5層)	大阪市文化財協会1985c・2006c
NG84-86	弥生時代後期～古墳時代中期遺物、庄内期井戸・建物、古墳時代中期土壇	大阪市文化財協会1985d・2006c
NG85-17	縄文時代晩期遺物	大阪市文化財協会1986・2006c
NG88-6	TP+7.8mで砂層(飛鳥時代初期の須恵器が出土)、飛鳥時代包含層、奈良時代溝	大阪市文化財協会1989・2006c
NG95-57	TP+8.2mで砂層(古墳時代後期中葉の須恵器が出土)、古墳時代後期溝、平安時代集落	大阪市文化財協会1998a
NG95-77	TP+8.0mで砂層(古墳時代後期前葉の須恵器が出土)、古墳時代後期溝	大阪市文化財協会1996・2006c
NG96-9	弥生時代後期水田、TP+8.2mで砂層、飛鳥～平安時代集落	大阪市文化財協会1999
NG96-40	TP+7.5～8.2mで砂層、飛鳥～平安時代溝	大阪市文化財協会1999
NG96-66	弥生時代中期～庄内期遺物、TP+7.8mで砂層、古墳時代後期～奈良時代集落	大阪市文化財協会1999
NG96-79	旧石器・縄文時代遺物、弥生時代後期～庄内期遺物、飛鳥～平安時代遺構	大阪市文化財協会1997
NG97-12	旧石器時代遺物集中部、縄文時代遺物、古墳時代木製品、飛鳥時代電燈・掘立柱建物	大阪市文化財協会2000a
NG97-13	古墳時代自然流路、平安時代溝	大阪市文化財協会2000a
NG97-41	縄文時代晩期～弥生時代前期流路、弥生時代中期溝、古墳時代水田、奈良～平安時代遺構	大阪市文化財協会1998b
NG97-43	弥生時代後期溝、古墳時代自然流路、飛鳥時代溝・土壇	大阪市文化財協会2000a
NG97-52	旧石器・縄文時代遺物、古墳時代中期木製品、古墳時代後期土手状遺構、飛鳥時代遺構	大阪市文化財協会2000a
NG97-56	縄文時代後期掘込み跡、平安時代土手状遺構	大阪市文化財協会2000a
NG98-19	古墳時代中期土壇状遺構、土器器・須恵器・玉類・製造土器	大阪市文化財協会2001
NG98-20	古墳時代中～後期流路、古墳時代中期土壇状遺構・竈穴住居、古代～中世耕地	大阪市文化財協会2001
TS97-7	平安時代後期井戸、土壇	大阪市文化財協会研究会2000a
TS98-8	奈良～平安時代初期の小穴、中世井戸	大阪市文化財協会研究会2000b
NG99-15	縄文時代石器集中部、弥生中～後期、古墳中期集落、飛鳥時代耕地	大阪市文化財協会2002b
NG99-19	縄文時代後期土壇、弥生～古墳時代前期水田、平安時代～近世耕地	大阪市文化財協会2002a
NG99-41	後期旧石器時代遺物、縄文時代早～前期住居跡、古墳時代前期水田、平安時代流路・土手	大阪市文化財協会2002a
NG00-6	古墳時代中期盛土遺構、古代溝、平安時代流路	大阪市文化財協会2003a
NG00-30	奈良時代ピット、平安時代土壇・流路	大阪市文化財協会2004a
NG01-14	古墳時代前期溝、古墳時代中期水田・溝群、飛鳥～奈良時代流路(黒面土器・飯骨出土)	大阪市文化財協会2004b
NG01-25	中世水田	大阪市文化財協会2004a
NG02-1	弥生時代中期集落、古墳時代畠状遺構、奈良時代流路	大阪市文化財協会2005a
NG02-4	古墳時代盛土、中世水田	大阪市文化財協会2004a
NG02-5	縄文時代中～後期土器、弥生時代前～中期溝・水田、古墳時代前期水田	大阪市文化財協会2005b
NG02-9	旧石器時代遺物、平安時代集落	大阪市文化財協会2003b
NG03-5	弥生時代中期方形周溝墓、古墳時代中期ウマの埋葬、古墳時代後期溝群	大阪市文化財協会2004c
NG03-9	弥生時代後期溝、古墳時代中・後期流路、平安時代集落	大阪市文化財協会2005a
NG04-3	弥生時代土壇・溝、古墳時代溝、飛鳥時代溝、奈良時代流路、平安時代溝、中～近世水田・畠	本野
NG06-3	古代流路、古墳時代溝、弥生時代盛土・溝	大阪市文化財協会2005b

第2節 発掘調査の経過と概要

今回報告するNG04-3次調査地は、東西方向の都市計画道路である数津長吉線予定地内に位置する。調査地の南隣でなされたNG02-1次調査地ではTP+7.0～7.3mにかけて弥生時代の居住域と古墳時代の溝群が、また、調査地の20m北でなされたNG03-5次調査地ではTP+6.5～7.1mにかけて、弥生時代中期の方形周溝墓や古墳時代の溝群が遺存していた。また、NG01-14次調査地と02-1次調査では東から西へ流れる流路が検出されており、本調査地にもこの流路が延びていると考えられた。

調査地は沖積地に位置しており非常に軟弱な地盤であり、NG02-1次調査と同様にシートパイルによる土留め工事を必要とした。工事車輛の通行や作業のための十分な空間を確保した上で、東西60m、南北5mの調査区を設定し、準備工を2004年9月6日から開始した。

2004年10月6日からは重機掘削を開始し、現地表下2.0mまでの地層を除去した後、近～中世の島畠や耕作溝、水田といった耕作に伴う遺構の調査を行った。第4層まで掘削を行った時点で切梁を架設する土留め支保工を行い、続いて調査区東半で奈良・飛鳥時代の流路を調査した。

調査区西半では水漬きの状態で堆積した泥層が分布しており、この泥層を除去すると古墳時代中～後期の作土層(第7a・b層)が遺存していた。本層上面では、NG02-1次調査で畠の畝間とした小規模な溝を多数検出した。さらに作土層の下には弥生時代の古土壤(第8a・b層)が拡がっており、土壌や溝などを検出した。土壌化や生物擾乱によって遺構の輪郭が不鮮明なものも認められたため、古土壤の層中および下面にかけても遺構の検出を行い、遺構の全容の把握に努めた。

弥生時代の遺構面を調査後、トレンチを部分的に入れて下位層を調べたが、古土壤や遺構は認められず、検土杖による下位層の確認を行い、1月31日に現地での調査が終了した。引き続き埋戻し作業に入り、3月8日には機材撤去などを含めたすべての作業を終了した。この間、外部に委託した基準点測量を12月24日に実施した。

表2 2004年度発掘調査の期間など

計画道路名	調査次数	調査地番	東西×南北	面積	調査期間	担当者
数津長吉線	NG04-3	平野区長吉出戸8丁目	60m×5m	300㎡	2004年9月6日～2005年3月8日	杉本厚典

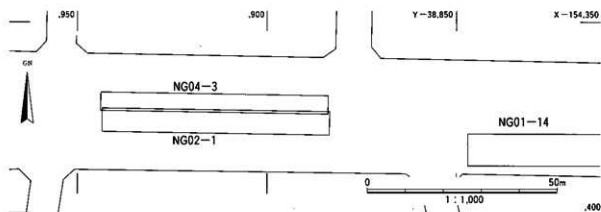


図3 NG04-3次調査地位置

第Ⅱ章 調査の結果

第1節 NG04-3次調査

1) 基本層序と出土遺物

i) 基本層序(図4・5、表3、別表1・2、図版1・2)

調査地の現地表高はTP+10.3mであった。平面調査は第3a層を除去した面から開始した。以下に述べる第0層から第3a層の記述は、重機掘削時の観察をもとにしている。

第0層：コンクリートや碎石を含む現代の盛土層で、層厚120cmであった。

第1層：オリブ黒色細粒砂～細礫混りシルトからなる現代作土層で、層厚15cmであった。

第2層：調査区の全域に分布する近世の作土層である。2層に分かれ、第2a層は暗緑灰色粘土質シルト、第2b層は灰オリブ色細礫混り砂質シルトで構成されていた。いずれも層厚10cmであった。

第3層：中世から近世にかけての作土層である。調査区のほぼ全域に分布する第3a・b層と、島島津の埋土である第3c層の3層に細分される。

第3a層は暗緑灰色シルトからなり、層厚15cm前後であった。第3b層はオリブ灰色粘土～シルト層で、層厚は下位の第4a層の高まりが顕著な部分では薄かったが、約20cmであった。下部は下位層に由来する砂礫が多く、下面では南北方向の耕作溝を検出した。第3c層は暗オリブ灰色細礫混りシルトで構成される淘汰の悪い地層で、1～3cm大の極細粒砂の偽礫を多く含んでいた。層厚は40cmであった。これらの層からは肥前陶器焼、丹波焼などの近世の陶磁器が出土した。

第4層：調査区の全域に分布する作土層および水成層である。粗粒の碎屑物で構成される第4a層、水田を被覆した第4b・4ci層、作土層である第4cii層、NR501埋没後に堆積して作土の母材となった第4d層に細分される。

第4a層はオリブ灰色シルト～細礫からなる水成層で、調査区中部付近では粗粒砂と中粒砂のラミナが顕著であった。南西から北東に向かって堆積していた。層厚は40cmであった。

第4b層は暗オリブ灰色細粒砂とシルトの互層で、層厚10cmの水成層であった。

第4c層は灰オリブ色極細粒砂～シルトの水成層(第4ci層)と、灰オリブ色粘土の作土層(第4cii層)に分かれる。層厚は前者が5cm、後者が40cmであった。第4ci層上面で溝と踏込み、第4cii層上面で畦畔を検出した。第4cii層の上部には酸化鉄の斑文、中部にはマンガンの斑文が認められた。本層中から黒色土器A類碗2が出土したが、NG02-1次調査地ではそれよりも新しい瓦器片が本層に対比される地層から出土している。

第4d層はNR501埋没後、調査区全域に堆積した水成層であり、灰色粗粒砂混り粘土で構成されていた。層厚は15cmであった。

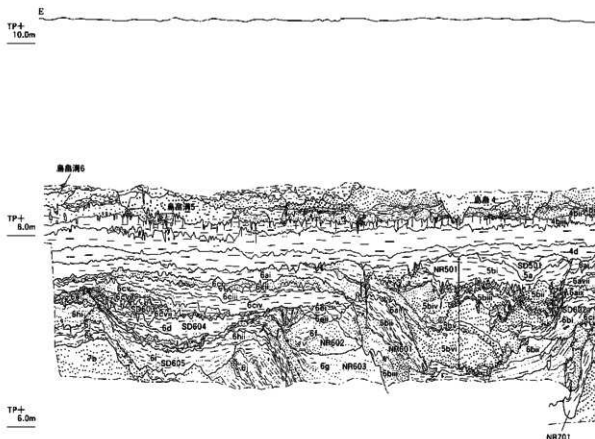


図4 NG04-3次調査南壁(東半)地層断面 ※スケールは図5と同じ

第5層：奈良時代の地層であり、溝内堆積層の第5a層と流路内堆積層の第5b層に分かれる。

第5a層はNR501の最上部に掘込まれた溝SD501を埋積した暗オリーブ灰色粘土～シルト層で、層厚30cmであった。SD501の溝底付近から鉄鍬68が出土した。

第5b層はNR501の流路内堆積層で、層厚は最大120cmであった。細礫～粗粒砂層と中粒砂～シルト層との互層であり、6層に細分された。最上部の第5bi層の上部は暗色化した古土壌で、その上にSD501、SK501・502、SP501などの遺構が掘られていた。また、最下部の第5bvi層は細礫や直径10cmの偽礫が多く含まれていた。第5bii～vi層中より人面墨画土器やミニチュアの甕・土師器・須恵器・木製品・動物遺体などが出土した。

第6層：古墳時代後期～飛鳥時代の地層であり、第6a～k層に細分される。

第6a層は第6ai～ix層に細分された。各層はそれぞれ暗オリーブ灰～暗緑灰色粘土～細粒砂で構成されており、最上部の第6ai層は暗色化していた。層厚は10～28cmであり、層中には酸化鉄やマンガンの斑文が観察された。

第6b層はSD601・602、NR601の埋土である。第6bi層はSD601・602の埋土であり暗オリーブ灰色細粒砂～粘土層で構成され、層厚は最大で40cmであった。いずれも層中に植物遺体が多く含まれていた。後述する木簡削屑は本層から出土した可能性が高い。第6bii層と第6biii層はNR601の埋土である。第6bii層は暗オリーブ灰色シルト～細粒砂層で層厚は20cm以上であった。第6biii層は灰色粗粒砂層で、層厚は40cmであった。

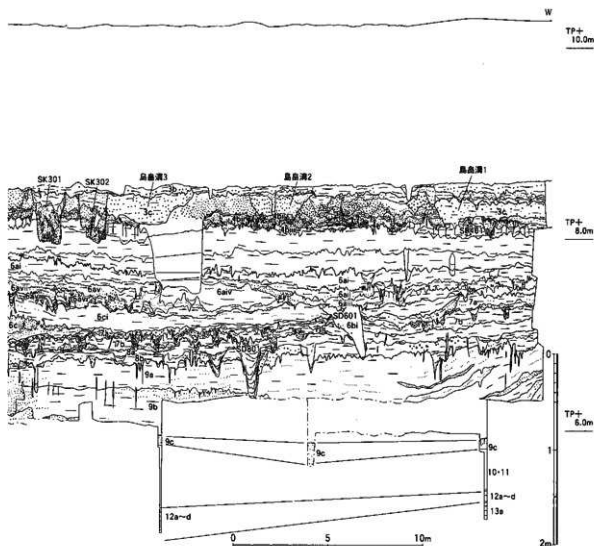


図5 NG04-3次調査南壁(西半)地層断面

第6c層は第6ci～vii層に細分された。第6ci層は暗オリーブ灰色粘土～細粒砂層であった。この層は調査区中部で30cmと厚く、東端では5cmと薄くなっていた。層厚の厚い部分では細粒砂のラミナが顕著であった。また、本層上面でSD601を検出したが、この遺構は地震によって生じた水平断層のために著しく変形していた。第6cii層は層厚10cmの灰オリーブ色中粒砂層であった。上部にはシルト・粘土が多く含まれ、わずかに暗色化していた。第6ciii～v層は調査区東部のSD603の上の窪地を埋積した水成層で、第6ciii・iv層が暗オリーブ灰～暗緑灰色シルト、第6cv層が暗緑灰色細粒砂層で、層厚は12～20cmであった。

第6cvi・cvii層はSD603の埋土である。第6cvi層が暗緑灰色シルト～細粒砂、第6cvii層が暗オリーブ灰色細粒砂混りシルトで構成され、下部から飛鳥Ⅱ期とみられる須恵器短頸壺38が出土した。

第6d層はSD604の埋土で、灰色細粒砂混りシルトで構成され、層厚は30cmであった。

第6ei・ii層はそれぞれ第6f・gの河成堆積層(NR602・NR603)の上の窪地を埋積した灰オリーブ～暗オリーブ灰色シルト質粘土層である。層厚はいずれも10cmであった。第6ei層には細粒砂が含まれ淘汰が悪く、古土壌とみられる。

表3 NG04-3次調査地の層序

項 目	主な特徴	厚 さ (cm)	特 徴	主な遺物	主な遺物	NG02-1層序	六反層序	最終層序
0	コンクリート・砂	120				0	0	0
1	オリーブ灰(10Y5/2)色細粒砂～細粒質シルト	15				1	1	1
2a	暗緑灰(7.5GY3/1)色粘土質シルト	10			硬質結核	2a	2	2
2b	灰オリーブ(5Y5/2)色細粒砂質シルト	10				2b	2	2
3a	暗緑灰(7.5GY3/1)色シルト	15			硬質結核	3a	2	2
3b	オリーブ灰(10Y4/2)色粘土～シルト	20				3b	2	2
3c	暗オリーブ灰(7.5GY4/1)色細粒砂質シルト	40			角礫1～6	3c	2	2
4a	オリーブ灰(10Y4/2)色シルト～凝層	40			硬質結核・暗結核	4a	4B1-h	4A-B
4b	暗オリーブ灰(7.5GY4/1)色細粒砂とシルトの互層	10				4b	4B11-h	4B11-h
4c1	灰オリーブ(5Y5/2)色細粒砂	5			SD401→406 掘込み	4c1	4B11-h	4B11-h
4c2	灰オリーブ(5Y5/2)色細粒砂	15			SR401→404	4c2	4B11-h	4B11-h
4d	灰(10Y4/2)色細粒砂質粘土	40			SD601, SR501, 502, SP501	4d	4B11-h	4B11-h
5a	暗オリーブ灰(7.5GY4/1)色粘土～シルト	30				5	5	5A-B-6A
5b	暗緑灰(7.5GY3/1)色シルト	30				5	5	5A-B-6A
5b1	灰オリーブ(5Y5/2)色細粒砂	<35				5	5	5A-B-6A
5b2	灰(7.5Y4/1)色シルト～細粒砂	<40			人間遺物土器	5	5	5A-B-6A
5b3	暗オリーブ灰(7.5GY4/1)色細粒砂	<35				5	5	5A-B-6A
5b4	灰(7.5Y5/1)色細粒砂	<15				5	5	5A-B-6A
5b5	オリーブ灰(10Y5/2)色細粒砂・シルト・暗緑色も細粒砂	40				5	5	5A-B-6A
6a	暗オリーブ灰(7.5GY4/1)色シルト～細粒砂	20			中粒流石土	6	6-7A1	6B-7A
6a1	暗オリーブ灰(7.5GY3/1)色粘土～細粒砂	15				6	6-7A1	6B-7A
6a2	暗オリーブ灰(7.5GY3/1)色粘土～細粒砂	12				6	6-7A1	6B-7A
6a3	暗オリーブ灰(7.5GY3/1)色粘土	25				6	6-7A1	6B-7A
6a4	暗オリーブ灰(7.5GY4/1)色シルト～細粒砂	18				6	6-7A1	6B-7A
6a5	暗オリーブ灰(7.5GY3/1)色シルト～細粒砂	15				6	6-7A1	6B-7A
6a6	暗緑灰(7.5GY4/1)色細粒砂	10				6	6-7A1	6B-7A
6a7	暗緑灰(7.5GY4/1)色シルト～細粒砂	10				6	6-7A1	6B-7A
6a8	暗緑灰(7.5GY4/1)色シルト	15				6	6-7A1	6B-7A
6b1	暗オリーブ灰(7.5GY4/1)色細粒砂～粘土	40			丁木屑・暗結核	6	6-7A1	6B-7A
6b2	暗オリーブ灰(7.5GY4/1)色シルト～暗結核砂	<20				6	6-7A1	6B-7A
6b3	灰(7.5Y4/1)色細粒砂	<40				6	6-7A1	6B-7A
6c1	暗オリーブ灰(7.5GY4/1)色粘土～細粒砂	30			SD601-602, NR601	6	6-7A1	6B-7A
6c2	灰オリーブ(7.5Y4/2)色中粒砂	10				6	6-7A1	6B-7A
6c3	暗オリーブ灰(7.5GY4/1)色シルト	12				6	6-7A1	6B-7A
6c4	暗緑灰(7.5GY3/1)色シルト	20				6	6-7A1	6B-7A
6c5	暗緑灰(7.5GY4/1)色細粒砂	12				6	6-7A1	6B-7A
6c6	暗緑灰(7.5GY4/1)色シルト～細粒砂	15				6	6-7A1	6B-7A
6c7	暗オリーブ灰(7.5GY4/1)色細粒砂質シルト	30			SD603	6	6-7A1	6B-7A
6d	灰(7.5Y5/1)色細粒砂質シルト	30			SD604	6	6-7A1	6B-7A
6e1	灰オリーブ(5Y5/2)色細粒砂質シルト質粘土	10			流石土	6	6-7A1	6B-7A
6e2	暗オリーブ灰(7.5GY4/1)色シルト質粘土	10				6	6-7A1	6B-7A
6f	灰(7.5Y5/1)色中粒砂～中粒砂	30				6	6-7A1	6B-7A
6g	灰オリーブ(10Y4/2)色細粒砂～中粒砂	30>				6	6-7A1	6B-7A
6h1	暗オリーブ灰(7.5GY4/1)色シルト	10			NR602, SD604-603	6	7A1	7B0
6h2	灰(10Y4/1)色シルト	10			NR603	6	7A1	7B0
6i	暗オリーブ灰(7.5GY3/1)色シルト～暗結核	25			SD605	6	7A1	7B0
6j	暗オリーブ灰(7.5GY3/1)色シルト質粘土	50				6	7A1	7B0
6k	暗オリーブ灰(7.5GY3/1)色細粒砂～シルト	18			SD7401-03, NR701	7a	7A11-vii	7B0-1
7a	暗緑灰(7.5GY3/1)色シルト～暗結核	7			SD7401-27	7a	7B	7B11-iii
7b	暗緑灰(7.5GY3/1)色細粒砂質シルト～暗結核砂	8-30			SD801→805, SK801-804, SK801-802	7b	8B	8A-B
8a	暗オリーブ灰(7.5GY3/1)色細粒砂	7			SK805-806	7b	8B	8B-C
8b	オリーブ灰(10Y3/1)色細粒砂	8				8	9B-C	8B-C
9a	オリーブ灰(10Y3/1)色細粒砂質シルト～暗結核砂	32				9a	10A	9A
9b	オリーブ灰(10Y3/1)色細粒砂～暗結核砂	32				9b	10B	9B
9c	灰(7.5Y4/1)色シルト質粘土	12					10C	9C
10-11	灰(10Y4/1)色中～暗結核砂	40					11	10-11
12a-d	灰(7.5Y2/1)色細粒砂～シルト	8					12A-D	12A-C
13a	黄灰(2.5Y5/2)色粘土	15>					13B	13B

暗色砂・古土塊
 水成岩
 作土層
 上層遺物
 中層内遺物
 下層遺物

第6f・g層はそれぞれNR602・603の河成堆積層である。第6f層は浅黄色中粒砂～シルト、第6g層は灰オリーブ色細～中粒砂で構成され、層厚は30cmであった。いずれも流路の中心から側方に細粒化していた。

第6h層はi・ii層に細分されるが、基本的に層厚10cmの灰～暗オリーブ灰色シルト層であった。調査区東部が高まっており、その部分を中心に暗色化が進んでいた。古土壌層であり、NR603の屑となっていた。

第6i層は層厚25cmの暗オリーブ黒色シルト～細粒砂層で、正級化していた。SD605の埋土に当る。

第6j層は層厚15～50cmの暗オリーブ灰色シルト質粘土層であった。本層上部には緩慢な水流によって堆積したとみられ、微細な植物遺体のラミナが観察された。

第6k層は層厚18cmの暗オリーブ灰色細粒砂～シルト層であった。上部には植物片のラミナが3枚認められ、下部には中粒砂が含まれていた。第6層と同様に、緩慢な水流によって堆積したとみられ

る。調査区東部の第7a層上面に形成されていた起伏に沿って堆積していた。SD603と重なる場所では細粒砂が多く含まれており淘汰が悪くなっていた。

第7層：第5・6層の流路が削り残した部分に見られた古土壤層で、第7a層と第7b層に区分された。各層上面で溝を検出した。

調査区西部の第7a層は暗緑灰色シルト～極細粒砂からなり、層厚は7cm前後であった。暗色化が顕著な古土壤であるが、層中には極細粒砂のラミナが見られ、河川の後背湿地のような堆積環境において地層が形成されたとみられる。また、初期須恵器の破片が3点出土した。そのうち2点は本層上面に付着した状態で、1点は本層上面から入ったクラックに落ち込んだ状態で出土した。また、調査区東部の第7a層は西部よりもやや粗粒の中～粗粒砂で構成され、層上部は全体的に暗色化していたが、下部にはラミナが顕著であった。

第7b層は暗緑灰色粗粒砂混りシルト～極細粒砂からなる古土壤で、層厚は8～30cmであった。上面で畝の畝間溝とみられる溝群を検出した。また、第5・6層の流路で分断されているが、調査区東端でオリブ黄色中粒砂で構成される水成層となり、布留式土器の細片が層中より出土した。

第8層：第5・6層の流路よりも西に分布する古土壤層である。暗オリブ黒色極細粒砂混りシルトからなる第8a層と、オリブ黒色細粒砂からなる第8b層に区分された。第8a層上面および第8b層層中において溝や土壌を検出した。本層中から河内Ⅳ様式に属する弥生土器や石庖丁・石鏃・サヌカイの剥片などが出土した。

第9層：調査地西半で確認した。オリブ黒色粗粒砂混りシルト～極細粒砂の第9a層と、暗オリブ灰色極細～粗粒砂の第9b層をトレンチで確認し、第9c層を検土杖で確認した。古土壤の第9a層からは縄文時代の長原式土器深鉢の破片18が出土した。

第9c層以下の地層は検土杖による確認作業をもとにして得た知見である。層相はこれまでの長原の基本層序で定義されてきたNG9C層、NG10・11層、NG12A～D層、NG13A層に対比されるため、各層に標準層序の層名に模して呼称する。

第9c層：層厚12cmの灰色シルト質粘土層であった。層中には植物遺体のラミナがあり、湿地のような堆積環境であったと想定される。これは長原遺跡東北地区におけるRK10C層の特徴と一致する。

第10・11層：層厚40cmの灰色中粒砂～極細粒砂層で、上方に細粒化していた。水成層であり、NG10・11層に対比される。

第12a～d層：層厚8cmの黒色極細粒砂～シルト層であった。水漬きの古土壤層とみられ、NG12A～D層に対比される。

第13a層：固く締まった黄灰色粘土層で、NG13A層に対比される。

ii)各層出土の遺物(図6・7、図版22・23)

1は第3a層から出土した肥前陶器碗の底部で、内面には胎土目が残る。17世紀前葉のものである。

2は4cii層から出土した黒色土器碗である。口縁端部はわずかに内側に肥厚する。内面のみ黒色であり、2～3mm幅のヘラミガキを斜め方向に施す。B-II-2[鈴木1982]に該当し、10世紀中葉～11世紀中葉のものとみられる。

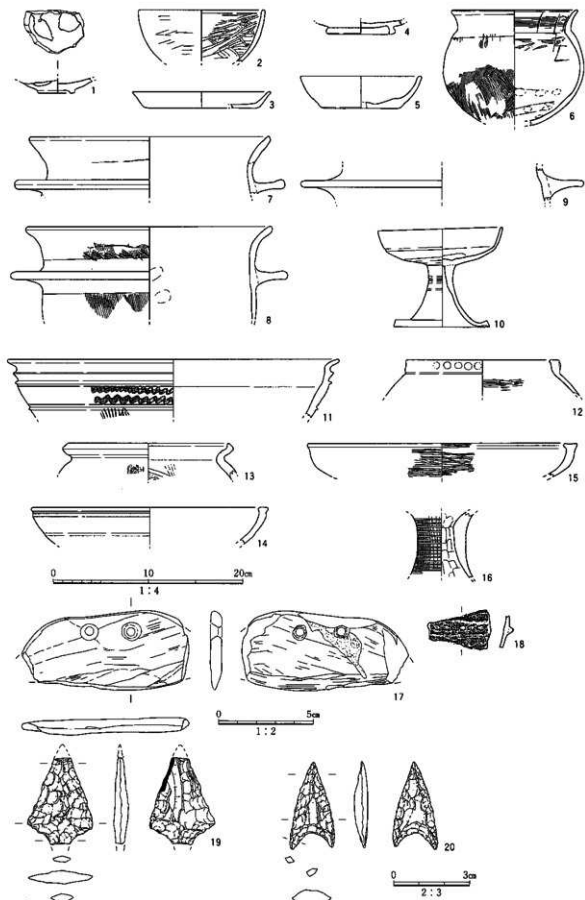


圖 6 各層出土遺物

第3a層(1)、第4cii層(2)、第6a層(3·4·9)、第6b層(7)、NR701(第7a層)~第6biii層(10)、第6c層(8)
第6e層(5)、第6cv層(6)、第7a層(11)、第7b層(13·16·17·19)、第8a層(12·14·15)、第9a層(18·20)

3・4は第6a層から出土した。3は須恵器皿である。口縁部内外ともに回転ナデで整える。4は須恵器杯底部である。内外面とも回転ナデを施す。5は第6e層から出土した須恵器杯である。内外面を回転ナデで整えた後、外部裏面に回転ヘラケズリを施す。6は土師器小型甕である。SD603の上に堆積した第6cv層から出土した。胴部内面は底部をユビオサエで整えた後、上半部をヘラ状工具によるヨコナデで整える。外面は全体的に縦方向のハケを施した後、肩部にナデを施す。口縁部は内面に横方向のハケ調整を施した後、内外面ともにヨコナデで整える。

7～9は生駒西麓産の土師器羽釜である。7は第6b層から出土した。口縁部外面に粘土帯の接合痕が残存するものの、内外面をそれぞれヨコナデで整える。鈐部より下には煤が付着する。8は第6c層から出土した。胴部内面をナデ、外面をハケで整えた後、口縁部をヨコナデで整える。また、頸部を取り付けた後、その上下を強いヨコナデで整える。口縁部外面には粘土帯の接合痕が残存する。9は第6a層から出土した。内外面ともにヨコナデで整える。鈐部より下には煤が付着する。

10はNR701内堆積層から第6biii層にかけて出土した古墳時代後期の須恵器高杯である。焼成は悪く瓦質である。杯部は回転ナデを施した後、外面下半をケズリで整える。脚部に9条のカキメが認められる。

11は第7a層から出土した須恵器高杯形器台の杯部である。ナデで内外面を整えた後、櫛指波状文とヘラ描錫齒文を施す。TG232～ON231型式に属するとみられる。

12・14・15は第8a層から出土した。13・16・17・19は第7b層から出土したが、本来は第8a層に帰属していたもので、いずれも弥生時代の遺物である。12は弥生時代中期の無頸壺口縁部である。外面は磨減が著しいが、内面には横方向のヘラミガキが認められる。口縁部外側には直径0.8cmの円形浮文を0.2cm間隔で付ける。13は甕である。口縁端部が上方に拡張し、端面が浅く凹む。胴部内面を斜め方向のハケ、外面を縦方向のミガキで調整後、口縁部に強いヨコナデを施す。14は高杯杯部である。内外面ともにヨコナデで整える。外面には2条の凹線が認められる。口縁端部を外側に拡張し、面を持たせている。15は高杯杯部である。内外面ともに横方向のミガキで整える。口縁端部を内外側にわずかに拡張して、面を持たせている。16は高杯の脚部である。内面は全体的にヘラ状工具で整え、上端部にユビオサエを施す。外面は縦方向のミガキで整えた後、16条の沈線で装飾する。

17は緑色片岩製石庖丁で、残存長9.0cm、残存幅4.1cm、厚さ0.6cmである。紐穴は両側穿孔であり、孔の間隔は2.2cmである。直刃で背部は湾曲する。19はサヌカイト製の打製有茎石鏃である。先端と基部を欠損する。残存長3.3cm、幅2.6cm、厚さ0.6cm、重量3.7gである。

18・20は第9a層から出土した。18は縄文時代の長原式土器深鉢の細片である。突帯は断面が三角形であり、その上から長径0.7cmの楕円形のギザミメを0.2cm間隔で入れる。胎土には角閃石が多く含



図7 第6bi層出土木簡剖面

まれており、生駒西麓産である。20はサヌカイト製の打製凹基石鏃である。長さ3.45cm、幅1.8cm、厚さ0.5cm、重量2.3gである。

21は第6bi層より出土した可能性の高い木簡削屑である。残存長11.0cm、幅1.5cm、厚さ0.1cmである。赤外線写真により「五束」の文字が確認される(図版23)。また、この木簡削屑に付着していた土に墨痕が転写されており、そこには「十五」と「束」の上部が認められた。これらのことから、「十五束」と書かれていたと判断される。

2) 遺構と出土遺物

i) 弥生時代の遺構と遺物(図8～12、図版3～6・23・24)

調査区西半の第8a層上面と第8b層内で土壌・溝・落込みを検出した。第8層は土壌化が著しいため、遺構検出作業が困難であることがNG02-1次調査で指摘されていた。本調査地においても第8層は土壌化が顕著であったため、平面調査に先行してトレンチを設けて地層断面を観察し、シルト分が多くて暗色化の顕著な第8a層と、砂質の第8b層とに細分を行った。また、トレンチ掘削時、上部の第8a層中から土器やサヌカイトの剥片やチップがまともに出土したため、第8a層に当時の生活面が存在すると考えた。遺物を可能な限り捕集し、遺構検出を正確に行うため、第8a層の掘下げに際して1mグリッドを設定し、各グリッドごとに遺物を取上げ、精査を行った。SK805・806は第8b層内、それ以外は第8a層上面で検出した。

a. 土壌

SK801(図8・9、図版3) SX801の南側で検出した土壌である。南北1.38m、東西0.86mの楕円形で、深さは0.05mであった。埋土はオリーブ黒色シルト混り粘土であった。年代のわかる遺物は出土しなかった。

SK802(図8・9、図版3) 南北1.30m、東西2.30mの楕円形に復元される。深さは0.10mであり、暗オリーブ灰色シルトからなる上層と、0.5cm大のシルトの偽礫を多く含んだオリーブ黒色シルトからなる下層に細分された。

SK803(図8・10、図版3・5・23・24) 調査区南西で検出した土壌である。南側はシートバイル打設時に破壊された。南北0.90m、東西1.53mの円形に復元される。深さは0.15mであり、埋土は4層に細分された。上層は黒色シルト混り粘土よりなり、泥質の堆積であった。中・下層はシルト混

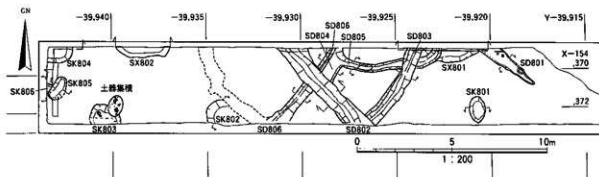


図8 第8層の遺構平面図

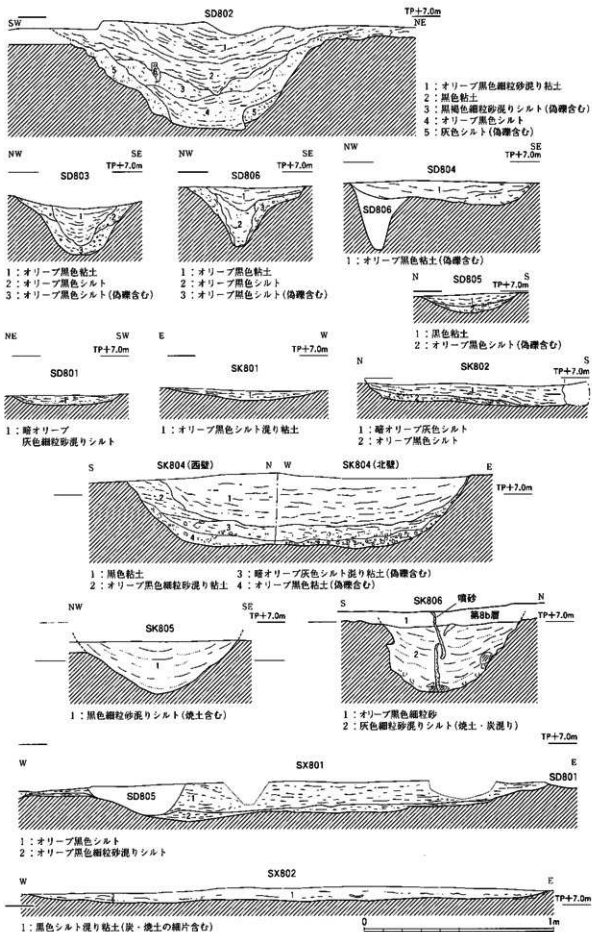


図9 第8層の遺構断面図

り細粒砂で構成されていた。遺物は上層から30・34・37をはじめとする弥生時代の遺物が出土した。

SK804(図8・9、図版3・5) 調査区北西で検出した。北側と西側はシートバイルを打設した時に破壊された。東西1.30m、南北0.70mの楕円形に復元される。深さは0.40mであり、埋土は上下2層に大別された。上層は黒色粘土よりなり、水漬きの堆積層であった。下層は3層に細分され、最上部は土壌の南側斜面に堆積したオリブ黒色細粒砂混り粘土層であった。さらにその下には暗オリブ灰色シルト混り粘土層・オリブ黒色粘土層が堆積しており、両層とも層中に緑灰色シルト質粘土の偽礫が含まれていた。

SK805(図8・9、図版5) 調査区西端で検出した土壌である。次に述べるSK806とともに、古土壌である第8b層内で検出した。トレンチによって西半の一部を壊したが、南北1.30m、東西0.70mの楕円形に復元される。深さは0.26mであり、埋土は黒色細粒砂混りシルトであった。埋土の下部には焼土や炭の細片が含まれていた。

SK806(図8・9、図版2・5) 調査区西端で検出した遺構である。調査区より西に続くため、全体の形状は不明である。ここではSK805と類似する堆積状況であることから土壌として報告する。南北0.55m、東西0.30m以上である。深さは0.34mであり、埋土は灰色細粒砂混りシルトであった。埋土の下部には焼土塊や炭の細片が含まれていた。第9a～b層に由来する噴砂の砂脈が埋土中に認められた。

b. 溝

SD801(図8・9、図版3) 南東-北西方向の浅い溝である。幅0.75m、深さ0.06～0.10mであり、埋土は暗オリブ灰色細粒砂混りシルトであった。この溝はSX801を切っていた。

SD802(図8・9、図版3・4) 調査区西半中央で検出した南東-北西方向の溝で、両端は調査区外に続いていた。遺構が本来掘込まれた面より約10cm下げて検出したため、幅0.84～1.00mであるが、断面図から1.60mの幅に復元される。深さは0.55mであり、埋土は大きく3層に分かれた。上層はオリブ黒色細粒砂混り粘土～黒色粘土で構成される水漬きの堆積層であった。中層は緑灰色シルト質粘土の偽礫を含んだ黒褐色細粒砂混りシルト～オリブ黒色シルトで構成されていた。側方から偽礫が落ち込む状況が観察されたため、機能時形成層とみられる。下層は1～2cm大の緑灰色のシルト質粘土の偽礫を含む灰色シルト層であり、この層を除去したところで加工痕と見られる直径5～10cmの円形の凹凸が認められたため、加工時形成層と判断される。

SD803(図8・9、図版3・4) 南西-北東方向の溝であり、北側でSD805とSX801を切っていた。幅0.70m、深さ0.25mであり、3層の埋土に区分された。オリブ黒色粘土からなる第1層は泥質で、水漬きの状態で堆積したとみられる。第2層はオリブ黒色シルトよりなる水成層であった。第3層はオリブ黒色シルトで構成され、緑灰色シルト質粘土の偽礫が多く含まれていた。第2・3層は機能時堆積層とみられ、それを浸漬した部分に第1層が堆積していた。

SD804(図8・9、図版3・6) 南西-北東方向の溝であり、北側においてSD805と連結していた。幅1.05m、深さ0.10～0.12mで、オリブ黒色粘土で埋っていた。SD806の続きの部分はこの溝を完掘したところで検出した。

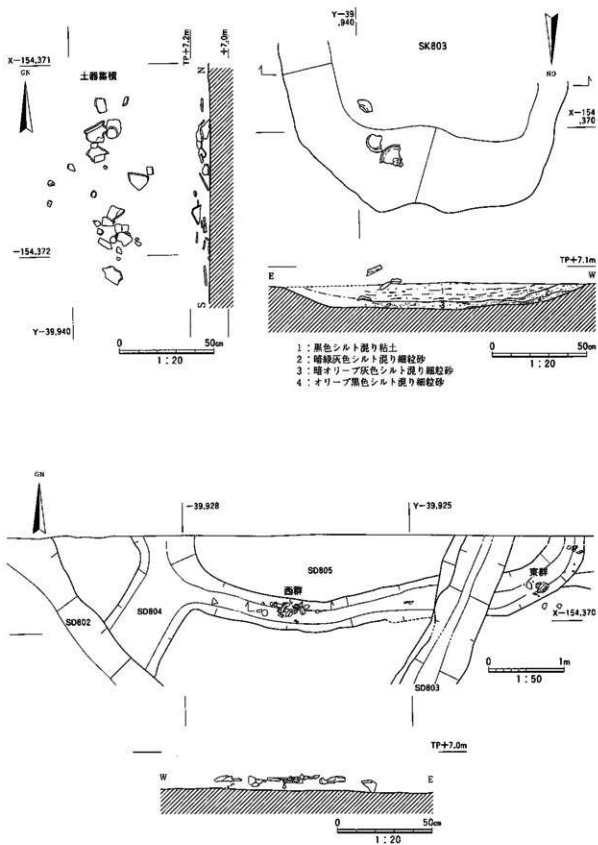


図10 土器集積平面・立面図、SK803平面・断面図、SD805平面・立面図

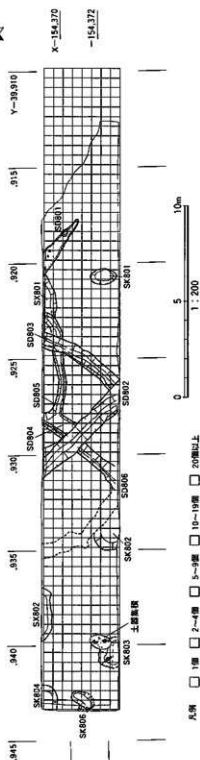
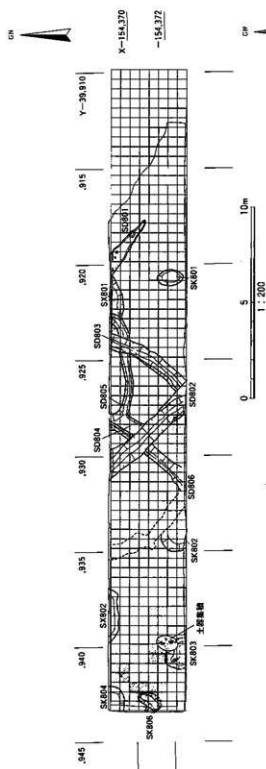


図11 第7b層下部～8a層上部遺物出土状況(上：土器 下：石器遺物)

SD805(図8・10、図版3・6) 弧状に延びる東西方向の溝であり、西側においてSD804と連結し、東側でSX801を切っていた。幅0.50m、深さ0.15mであり、埋土は上層が黒色粘土、下層がオリブ黒色シルトで埋っていた。とりわけ下層には緑灰色シルト質粘土が多く含まれていた。

溝の埋土から22・23・24・33・35が出土した。西と東に土器のまとまりがあり、西群からは24・35、東群からは33が出土した。いずれも破片の状態であり、完形に復元できるものは無かった。

SD806(図8・9、図版3) 南西―北東方向の溝であり、両端は調査区外に続いていた。北側はSD802・804に切られていた。溝の幅はSD802より南西で0.60m、北東で0.32mであり、深さは0.30～0.40mであった。埋土は3層に細分された。第1層はオリブ黒色粘土であり、水漬きの状態で堆積したとみられる。第2層はオリブ黒色シルト、第3層は緑灰色シルト質粘土の偽礫を多く含んだオリブ黒色シルトによってそれぞれ構成されていた。埋土から32が出土した。

c. その他の遺構

SX801(図8・9、図版3) 調査区西半北東部で検出した落込みであり、SD803・805に切られていた。東西2.20m以上、南北0.64m以上であり、深さ0.15mであった。埋土は上層がオリブ黒色シルト、下層がオリブ黒色細粒砂混りシルトでそれぞれ構成されていた。埋土から26・36が出土した。

SX802(図8・9、図版3) 調査区西半北西部で検出した深さ0.07mの浅い落込みである。東西2.80m以上、南北0.34m以上であり、黒色シルト混り粘土で埋っていた。埋土から29が出土した。

土器集積(図8・10、図版3・6) SK803の上にあった土器片の拡がりである。壺(25・27・28・31)の破片が出土した。

d. 各遺構出土の遺物(図11・12、図版23・24)

各遺構の出土遺物について報告する前に、遺構を検出するまでに除去した古土壌中における遺物の出土状況について検討しておきたい(図11)。上述したように第8a層の上面が遺構の形成された面とみられるが、遺構の輪郭は第8a層を掘下げる過程でより鮮明になった。

第8a層の掘下げにあたって、下位で検出が予想される遺構と、土器や石器の分布様態との間にある一定の関連性や傾向が認められるかどうかを確認することを目的に、0.5mグリッドを設定して遺物の取上げにつとめた。また、第7b層下部と第8a層上部の層境は不鮮明であり、第8a層からの避難資料も多かったため、第7b層下部でも遺物のグリッド別取上げ作業を行った。

石器遺物は第7b層下部および第8a層上部から出土した剥片やチップ・石器遺物の点数を示した。図から、SK802～804など下位で土壌を検出した区域に分布する傾向がうかがえる。

土器は第8a層上部から出土した点数を示した。下位で遺構を検出した区域にも分布が認められるが、調査区の西側に向うにつれて点数が増加する傾向が認められた。第8a層は南西に向って高くなっており、調査区の西から南西および南接するNG02-1次調査地で弥生時代中期の遺構が多数検出されている。すなわち、居住域の中心部に向うにつれて土器の出土点数が多くなるといえる。

次に遺構出土遺物について述べる(図12、図版23・24)。25・27・28・31は土器集積、26・36はSX801、29はSX802、32はSD806、22・23・24・33・35はSD805、30・34・37はSK803から出土した。

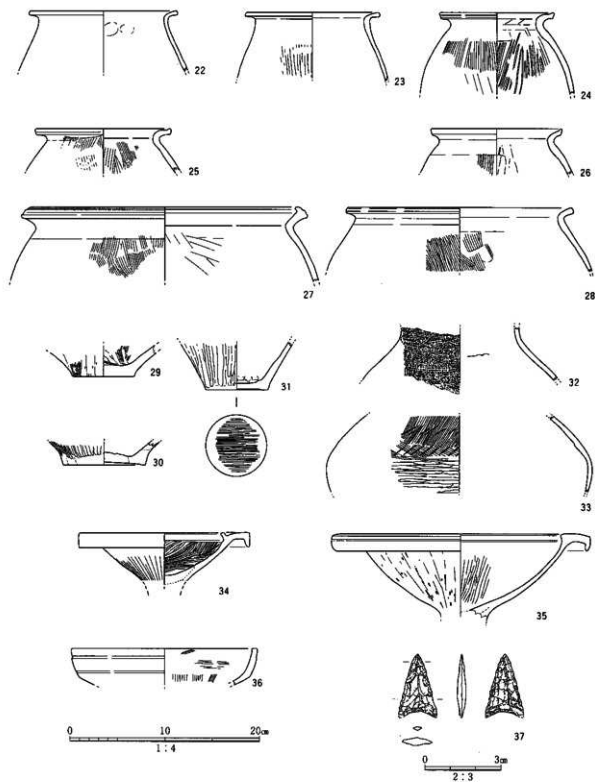


図12 第8a層の遺構出土遺物

土器集積(25・27・28・31)、SX801(26・36)、SX802(29)、SD805(22・23・24・33・35)、SD806(32)、SK803(30・34・37)

22～26は口径が16.0cm以下の甕口縁部である。22・23はいずれも胎土に角閃石を多く含む河内型甕である。22の胴部外面は磨滅しているため不明であるが、内面はナデ、頸部付近をユビオサエで整えた後、口縁部にヨコナデを施す。23は胴部内面をナデ、外面を縦方向のミガキで調整した後、口縁部を強いヨコナデで整える。肩部の張出しが弱い。

端部を丸くおさめる河内型甕に対して24～26はいずれも口縁端部を上方にわずかに拡張し、胎土には長石・石英粒を多く含む。24は内外面に縦方向の粗いハケを施した後、頸部と口縁部をそれぞれヨコナデで整える。25は胴部を内外面に縦方向に粗いハケを施した後、口縁部に強いヨコナデを施す。26は口縁端部はわずかに肥厚する。肩部は内外面ともに縦方向のハケで整え、口縁部には強いヨコナデを施す。

27・28は口径が22～26よりも一回り大きな甕口縁部である。それぞれ直径30.2cm、24.2cmに復元される。27は口縁端部を上方に拡張し、端面に2条の凹線文を施す。胴部内面はナデ、外面は縦方向のハケで整える。28は河内型甕である。胴部内面は縦方向のハケ、外面はナデ調整後、縦方向にミガキを施す。口縁部はヨコナデで整える。角閃石を多く含んだ生駒西麓産である。

29～31は底部である。29は甕の底部とみられる。内面をハケ、外面を縦方向のケズリで整え、底部外面には粗いハケを施す。30は甕の底部である。外面に縦方向のミガキが認められる。底部裏面には平行する条線がわずかに残っており、工具を用いたナデあるいはミガキによるものとみられる。31は河内型甕の底部である。外面は縦方向のミガキが顕著で、底面にはミガキを平行して密に施す。胎土には角閃石が多く含まれ、生駒西麓産である。

32・33は壺胴部の破片である。32は櫛描文を施した生駒西麓産の太頸甕である。櫛描文帯は幅1.2cmで、上から直線文・簾状文・直線文を施す。簾状文は3～4mm間隔で密に施され、第IV様式の古相の特徴を示す。33は内面をナデ、外面を斜めおよび縦方向のハケで整えた後、胴部最大径以下に横方向のミガキを施し、肩部にヘラで線刻文を入れる。線が胴部最大径やや下方向に帯状に付着するが、肩部の張出しが著しいことから壺とした。

34～36は高杯杯部である。34・35は口縁部を垂下させたものである。34の口径は17.8cmであり、やや小型の杯部に復元される。口縁端部外面には強いヨコナデを施す。杯部は内外面ともにミガキで整え、杯部の底には円盤充填の痕跡が認められる。全体的に赤く変色しており、二次的に熱を受けた可能性がある。河内Ⅲ様式のものに比べて杯部が浅いことから、河内Ⅳ様式のものともみられる。35は口縁部の外面を横方向のナデで整えた後、ミガキを巡らせる。杯部は内面に放射状のミガキを施しており、外面は下から上方向にケズリを施す。杯部の底には円盤充填の痕跡が認められる。36は口縁部がやや外開きに立上がる。外面は凹線を2条入れ、ヨコナデで整えており、内面はハケ調整後、ナデを施す。全体的に赤く変色しており、二次的に熱を受けた可能性がある。河内Ⅳ-1様式に属する。

37はサヌカイト製の凹基式打製石鏃である。長さ2.5cm、幅1.5cm、厚さ0.35cm、重量0.8gである。基部の抉りは比較的浅い。

ii) 古墳時代の遺構と遺物(図6・13～15、図版7～11・22・23・25)

調査区西半には古墳時代に形成された第7a・b層が広がっており、両層の上面においてそれぞれ溝

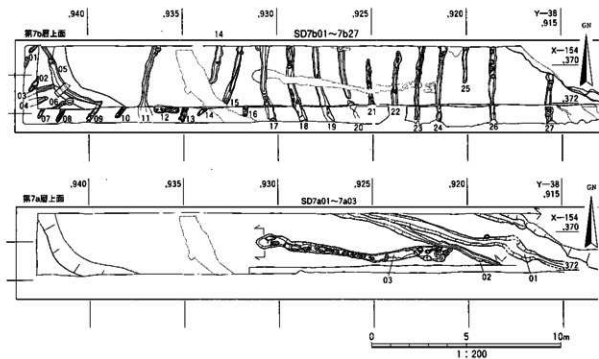


図13 第7a・b層上面の遺構平面図

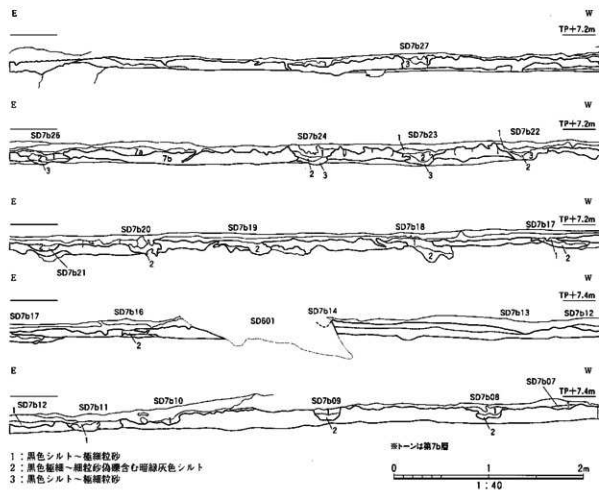


図14 第7b層上面の溝群断面図

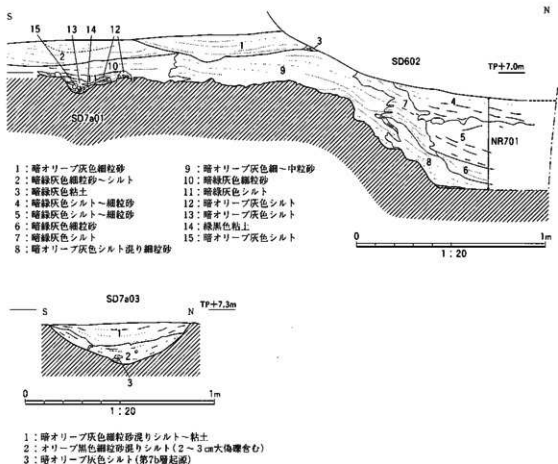


図15 第7a層上面の遺構断面図

群を検出した。

第7b層上面ではSD7b01～7b27を検出した。これらの溝は幅0.30～0.40m、深さ0.10～0.20mで、約1.2mの間隔で並んでいた。東部では南北方向に延びていたのに対して、西部では南西から北東に延びていた。

溝の断面はU字形を呈するが、上部が東側にずれているものが多く、上位のSD601と同様に、地震による影響を受けたものと推測される。溝の埋土は、SD7b22～7b26に代表されるように黒色シルト～極細粒砂からなる上層、暗緑灰色シルトを主体として黒色極細～細粒砂の偽礫を含む中層、黒色シルト～極細粒砂からなる下層の3層で構成されていた。

第7a層上面の溝群はSD7a01～7a03の3条で、第7b層上面のものより少なかった。また、第7b層上面で検出した溝群が南北方向と南西～北東方向に延びていたのに対して、第7a層上面の溝群は東西方向に延びていた。埋土はシルトで構成される。とりわけ上層の暗オリーブ灰色細粒砂混りシルト～粘土はNR701から供給されており、NR701が溢流した時に埋没したと判断される。

これらの溝群の機能としては畝の畝間の可能性が考えられる。埋土からは本来第8層に帰属していたとみられる弥生土器片が多かったが、第7a層上面から、上述した須恵器高杯形器台の杯部の破片11(図6、図版22)が出土しており、古墳時代中期の遺構とみられる。

NR701 調査区中部の第7a層上面で検出した流路である。東側はNR601によって壊されていたが、

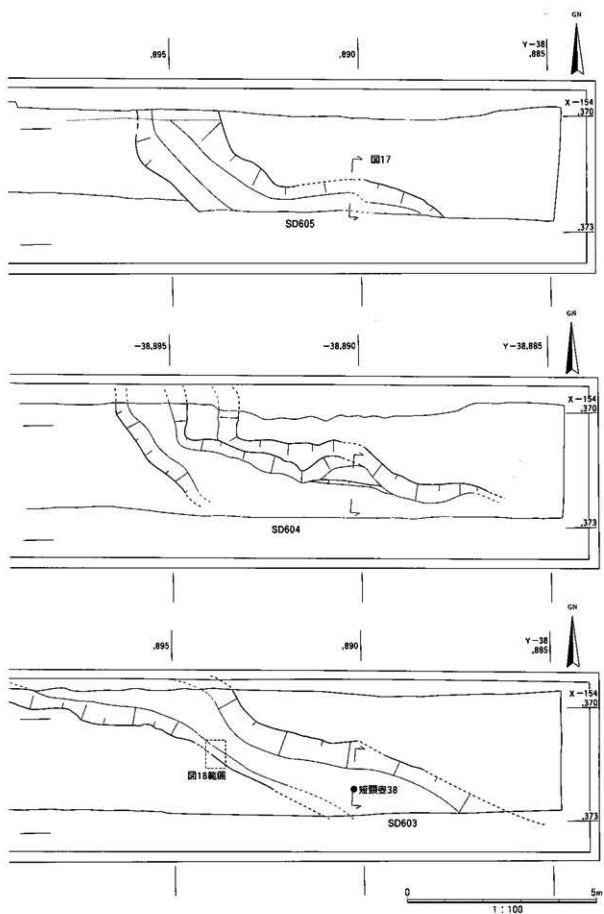


図16 SD603~605平面図

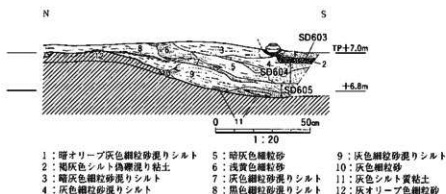


図17 SD603～605断面図

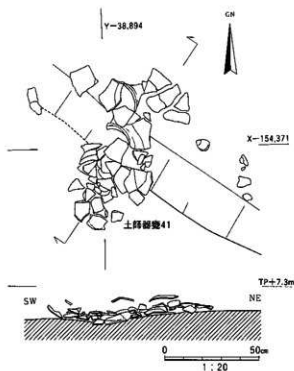


図18 SD603上面土器出土状況平面・立面図

幅2.00m以上で深さ0.56mである。この流路はシルト～細粒砂で埋っており、ここから供給された細粒砂やシルトでSD7a01～7a03は埋っていた。NR601の底(6biii層)から破片の一部が出土した須恵器高杯10はこの流路からの遊離した遺物とみられ、古墳時代後期頃に機能していた流路と推測される。

iii) 古墳時代後期～奈良時代の遺構と遺物(図16～21、図版11～13・25～27)

調査区東半でSD603～605・NR601～602、西半でSD601・602を検出した。検出した地層が下層の遺構から順に報告し、最後にまとめて遺物について報告する。

a. 各層検出の遺構(図16～19、図版11～13・16)

SD605 第6j層の上面で検出した南東～北西方向の溝である。幅1.70～2.50m、深さ0.25mで、埋

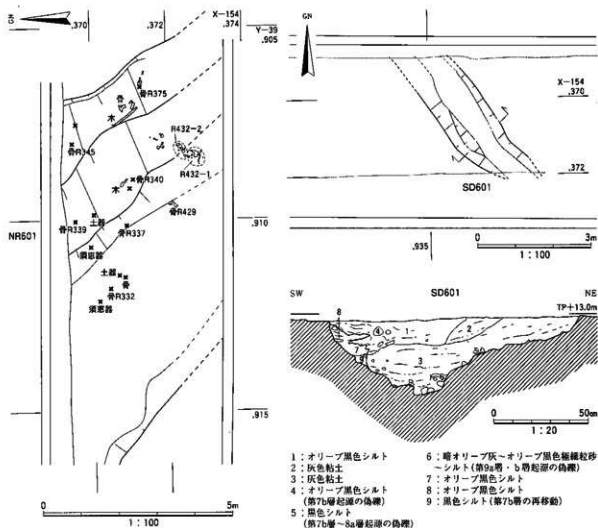


図19 NR601平面図、SD601平面・断面図

土は暗オリーブ黒色シルト～細粒砂であった。埋土の最上部で土師器壺39が出土した。

NR603 第6hii層上面で検出した流路である。西側をNR601に切られており、流路の底は掘削予定深度よりもさらに深くなるため、正確な形状・規模は把握できなかったが、断面での観察にもとづくと、幅5.00m以上、深さ0.30m以上となる。流路内に堆積した水成層のラミナの傾斜方向から判断すると、西南西から東北東に流下していたとみられる。

NR602 第6hi層上面で検出した流路である。幅5.00m以上、深さ0.40mであった。西側をNR601に切られていた。

SD604 第6ei層上面で検出した南東～北西方向の溝である。幅2.00～2.75m、深さ0.23～0.30mで、埋土は灰色細粒砂混りシルトであった。土師器壺42が出土した。

SD603 SD604の埋没後に掘削された東南東～西北西方向の溝である。幅1.40～2.15m、深さ0.44～0.50mで、部分的に褐灰色シルト偽層混り粘土が溝底に堆積し、暗オリーブ灰色細粒砂混りシルト層(第6cvii層)、暗緑灰色シルト～細粒砂層(第6cvi層)で埋まっていた。この溝の埋没した直上から土師器壺41が、埋土から土師器壺40をはじめ、ミニチュアの土師器高杯43～46が出土した。さらに最下層の暗オリーブ灰色細粒砂混りシルト層の上面で、須恵器短頸壺38が正置した状態で見つかった。

SD603がほぼ埋まった後の窪地には主に暗緑灰色細粒砂(第6cv層)、暗オリーブ灰~暗緑灰色シルト(第6cii・civ層)が堆積していた。その上位には古土壌(第6cii層)が形成されるが、それが十分発達する前に、粘土~細粒砂(第6ci層)によって覆われる。以下に述べるSD601・602・NR601はいずれも第6ci層の上面で検出した。

NR601 幅5.00m以上、深さ1.10mの南東~北西方向の流路である。NR501によって西肩の大半が削られており、西肩にSD602が掘られていた。埋土はシルト~粗粒砂で主に構成されており、側方に細粒化していた。飛鳥時代の土師器杯47や壺56・57、須恵器杯49、奈良時代の土師器杯48、須恵器杯50などが出土した。

SD601 調査区西半で検出した幅1.30m、深さ0.40mの南東~北西方向に延びる溝である。埋土は主に灰色粘土で構成されており、主に第7a・b層に由来する5cm大の偽礫が多く含まれていた。地震

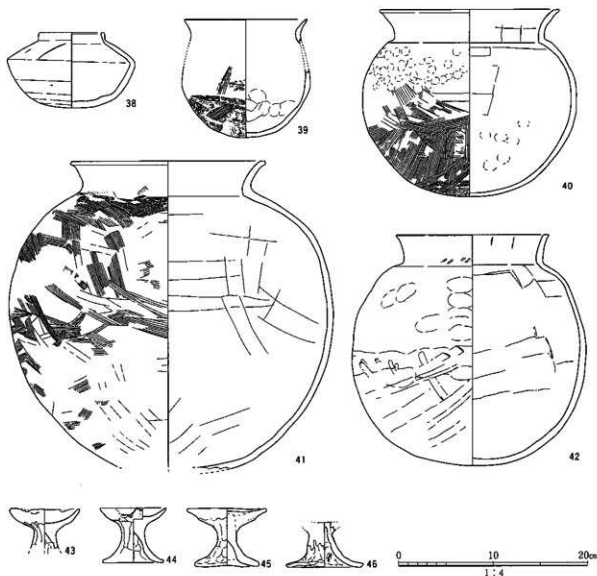


図20 SD603~605出土遺物

SD603(38・40・41・43~46)、SD604(42)、SD605(39)

によって溝の西肩が北東側へ、溝底が南西側に水平方向にずれが生じており、偽稜の分布は北東側の斜面では下部に、南東側の斜面では上部に多く認められた。

埋土から遺物は木片2点と土器の細片が少量出土したが、遺構の年代を特定する資料は出土しなかった。また、木片も加工されたものかどうか判然としなかった。この溝は次のSD602と共に木簡削屑が出土した可能性のある遺構の一つである。

SD602 南東-北西方向に延びていたとみられる溝である。溝の大半はNR501によって削られており、南壁断面によってその存在を確認した(図4)。深さは0.40mで、埋土は主に暗オリーブ灰色細粒砂-粘土で構成されており、層中には細-極細粒砂のラミナが顕著であった。また埋土には自然木の細片が多く含まれており、木簡削屑が出土した遺構の可能性があったため、排土を回収し一部を水洗したが、加工された材は見つからなかった。

b. 各遺構出土の遺物(図20・21、図版25～27・29)

38・40・41・43～46はSD603、39はSD605、42はSD604から出土した。

38は須恵器短頸壺である。内外面とも回転ナデで整えた後、底部外面にケズリを施す。肩部にはヘラ記号が認められる。

39は小型の土師器甕である。胴部外面はハケ、内面はユビオサエを施した後、板状工具によるナデで整える。口縁部はヨコナデを施す。外面には底部周辺を中心に煤が付着する。40は中型甕である。口縁部端面に沈線が1条認められる。胴部内面は底部をユビオサエで整えた後、上半部をヘラ状工具による横方向のナデで整える。外面は全体的に縦方向のハケを施した後、肩部をユビオサエで整える。このユビオサエは右上がりに連続して施される。口縁部は内面にヘラ状工具による横方向のナデを施した後、内外面ともに強いヨコナデで調整する。胴部外面は煤の付着が顕著であるが、内面には胴部最大径のやや下方にわずかにコゲが残る。

41は大型の土師器甕である。口縁部端面に沈線が1条認められる。胴部外面は斜め方向のハケを施す。胴部内面は工具によるヨコナデで調整する。胴部調整後に口縁部に強いヨコナデを施す。42は土師器甕である。口縁部は外側にわずかに出る。胴部外面はナデを施した後ユビオサエで整える。内面は板状工具によるヨコナデを施す。口縁部は内面をヘラ状工具によるナデで整えた後、さらに内外面ともに強いヨコナデを巡らせて整える。

43～46はミニチュア高杯である。43は手捏ねによる成形で不均整であるが、杯部内外面をナデにより平滑に整えた後、脚部に縦方向のナデを施す。44は手捏ねによる成形であり著しく不均整である。杯部内面はいいないなナデによって平滑にする。外面は右下から左上方向にナデを施す。脚部は縦方向のナデを左から右へ行って面を持たせ、脚根部は横方向のナデを巡らす。また、杯部の縁は外側からヘラを剃って、焼成前に欠いている。45は脚部に杯部を付加した後、脚部の粘土を杯部側に押し上げて接着を強固にしている。口縁部および脚根部にそれぞれヨコナデを施す。46は手捏ねで成形しており、脚根部はヨコナデで整える。脚部上端の外側に剥離痕が認められ、脚上端部側縁に粘土を付加して杯部を成形していたとみられる。

これらのSD603～605には古墳時代後期から飛鳥時代にかけての遺物が含まれていたのに対して、

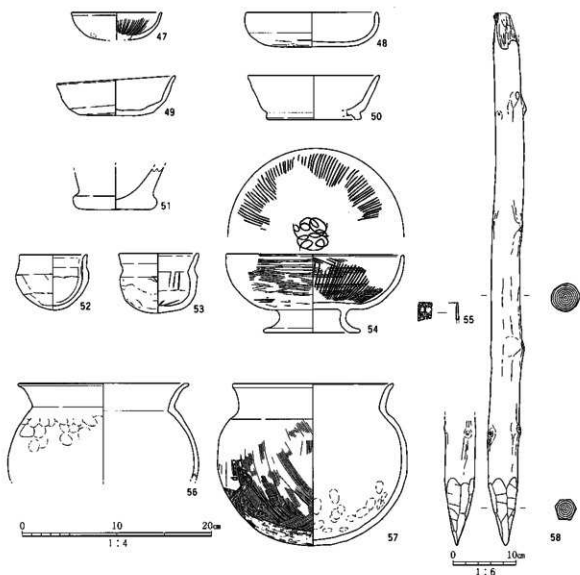


図21 NR601出土遺物

以下に述べるNR601からはが飛鳥時代から奈良時代にかけての遺物が出土した。遺物量はコンテナ3箱程度であり、それらの中で完形に近いものや時代的な特徴がうかがえる資料を対象にして図化を行った。

47は小型の土師器杯である。口縁端部はやや外側に開く。内外面ともにヨコナデで整え、内面には1～2mm間隔で放射状に暗文を施す。飛鳥Ⅱに属する。48は土師器杯である。口縁端部外面がわずかに凹む。内外面ともにナデで整える。底部外面はナデ調整した後に部分的にユビオサエを施す。49は須恵器杯である。内外面を回転ナデで整えた後、底部外面に回転ヘラケズリを施す。底部裏面は器面調整を省略しており、焼成時に他の個体が熔着した痕跡が認められる。50は須恵器杯である。内外面とも回転ナデで整える。8世紀中葉のものともみられる。51は須恵器鉢である。全体的に磨滅しており調整は不明である。

52・53はミニチュアの甕である。52は胴部内外面をヨコナデで整えた後、口縁部を強いヨコナデによって調整する。53の胴部内面は板状工具によるヨコナデを施す。口縁部は内外面ともに強いヨコ

ナデを施す。胴部外面は斜め方向のナデで調整するが、これは口縁部を調整した強いヨコナデによって切られている。

54は短く外反する脚台をもった台付鉢である。鉢の内面は横方向のヘラミガキで整えた後、立上がり放射状、底面に渦巻状の暗文を入れる。外面は下部を左から右方向にケズリを入れ、さらにそれより上位に横方向のミガキを施す。脚台部は強いヨコナデを巡らせ、ていねいに整形する。

55は製塩土器口縁部の細片である。器壁は薄く、灰白色を呈する。ナデで整えた後、口縁部外面にユビオサエを施す。

56・57は中型の土師器甕である。56は胴部内面はユビオサエの後にヨコナデによって整え、外面は不規則なユビオサエを施す。口縁部には内外面ともに強いヨコナデを巡らせて整える。57は底部内面をユビオサエで整えた後、胴部内面をナデで整える。外面は縦方向のハケを施す。口縁部は内外面ともに、強いヨコナデで整える。

58は残存長85.0cm、直径4.6cmの杭である。枝を落とし樹皮を剥いだ丸太材の先端を11.0cmにわたって削り落として鋭利にしている。

iv) 奈良～平安時代の遺構と遺物(図22～26、図版14・15・17・27・28)

a. 検出遺構(図22・23・25、図版14・15・17)

NR501 第6a層上面で検出した南東～北西方向の自然流路である。本遺構は流れの方向や規模、後述する遺物の年代や種類から判断して、NG01-14・02-1次調査地で検出されたNR501の続きとみられ、NR501と呼称する。この流路は幅8.20m、深さ1.38mであり、埋土は基本層序で述べた第5bi～vi層に細分された。流路の中心では砂礫が堆積していたが、側方にかけて細粒化しており、シルトや粘土へと変化していた。

NG01-14次調査地で検出されたNR501では、祭祀に用いられた墨画土器・木製品などの遺物や動物遺体が多量に出土したが、本調査地ではNG02-1次調査地と同様に少量であった。流路の肩で大型の須恵器甕67を検出したが、それ以外は流路内より出土した。

NR501が埋没したことによって、0.15mの高まりが形成された。この高まりの暗色化が著しい上部が第5a層であり、この地層の上面でSD501、SK501・502、SP501を検出した。

SD501 南東から北西に延びる幅2.65m、深さ0.18mの溝である。溝の大半は炭の細片を含む暗オリーブ灰色粘土～シルトで埋っていた。溝底には暗緑灰色シルト混り粘土が堆積しており、その上に付着した状態で鉄製の曲刃鎌68が出土した。また、溝の東側部分には溝底で踏込みを検出した。

SK501 一辺1.80～2.20mの隅円長方形で、深さ0.27mの土壌である。埋土は5層に細分され、土壌の底には加工痕とみられる凹凸が認められた。

SK502 一辺0.75～0.90mの隅円長方形で、深さ0.22mの土壌である。土壌の底には加工痕とみられる凹凸があり、その直上には第5a層の灰色細粒砂を母材とする加工時形成層が堆積していた。

SP501 一辺0.30mの方形で、深さ0.07mのビットである。埋土は灰～灰オリーブ色シルト～粘土で構成され、柱痕跡は認められなかった。

b. 各遺構出土の遺物(図24・26、図版28)

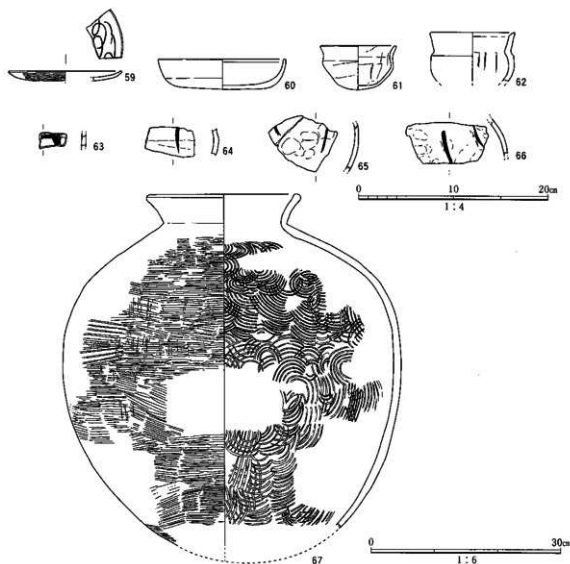


図24 NR501出土遺物

59～67はNR501から出土した。59～66は土師器である。59は皿であり、内面はナデ、外面はヘラミガキで整えた後、内面に渦巻状の暗文を施す。平城宮土器Ⅰの時期のものとみられる。60は杯である。口縁端部は丸く内側に肥厚する。内外面ともにヨコナデで整え、底部裏面にはヘラケズリを施す。また、底部外面には葉脈の圧痕が残存する。ナデ・ケズリの調整はこの圧痕より後に施されており、成形後、外面調整を行う前に葉の上に置いていた可能性がある。

61はミニチュア甕である。外面はナデ、内面は底部付近をユビオサエ、胴部を板状工具によるヨコナデで整える。胴部を調整した後、口縁部を内外面ともに強いヨコナデで整える。右上がりの接合痕が一定の間隔で認められ、幅1.5cmの粘土帯を巻上げて成形したことがうかがえる。62はミニチュア甕である。胴部内面をヘラ状工具によるヨコナデ、外面をナデで整えた後、口縁部に強いヨコナデを施す。

63～66は墨痕を持つ甕胴部の破片である。いずれも文字とは特定できず、墨画土器のものとみられる。63は外面にユビオサエの痕跡が顕著であり、内面にはヨコナデが認められる。64は外面にユビオ

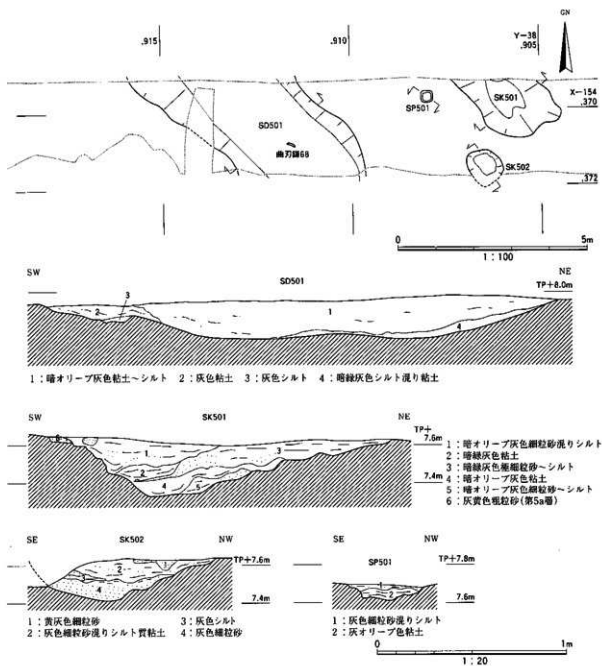


図25 第5a層上面の遺構平面・断面図

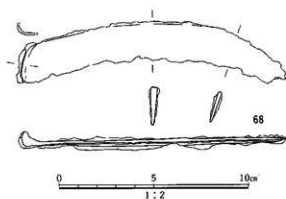


図26 SD501出土の曲刃鎌

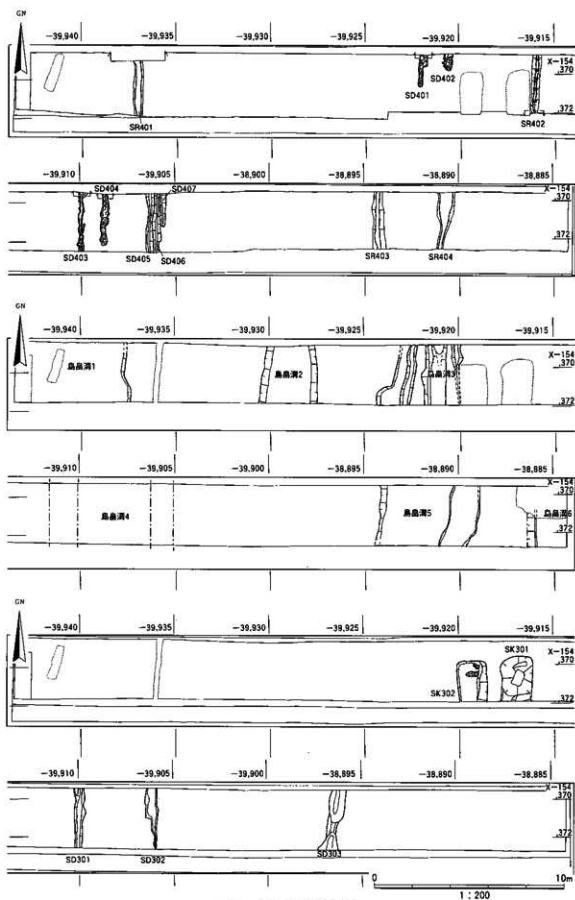


圖27 各層檢出遺構平面圖

上：第4ci-ii層上面、中：第3c層基底面、下：第3b層下面

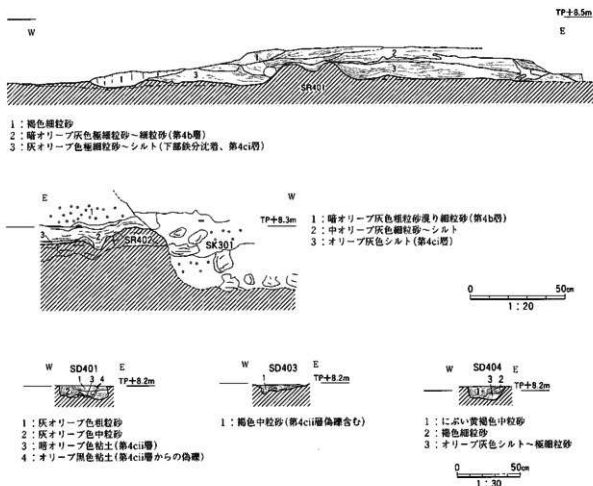


図28 第4c層上面の遺構断面図

サエの痕跡が観察されるが、内面の調整は磨滅しており不明である。65は2条の線が筆によって描かれる。内面はヘラ状工具による横方向のナデ、外面はユビオサエが認められる。66は平行する3条の線が描かれる。内面はヘラ状工具によるヨコナデ、外面はユビオサエが認められる。NG01-14次調査地のNR501では多数の人面墨面土器が出土しているほか、NG02-1次調査地のNR501でも人面墨面土器の一部とみられる土器片が数点出土している。本調査地出土の墨面土器も、土器の種類や墨による表現がこれらと類似する。

67は大型の須恵器甕である。口縁端部はわずかに肥厚し丸く整える。胴部外面は平行タタキ、内面にはタタキの当具痕が認められる。

68はSD501から出土した曲刀鎌である。切先を欠くが、全長14.2cm、幅2.0cmに復元される。刃部厚0.3cmで基部を0.4cm折り曲げており、木質は認められなかった。

v) 中世の遺構と遺物(図27・28、図版18～20)

作土層である第4cii層上面で畦畔4条、第4ci層上面で溝7条、踏込みを検出した。溝は第4cii層上面から掘られており、畦畔の構築より後に設けられたものである。また第4ci層上面には多数の踏込みも認められた(図版18～20)。

a. 畦畔(図27・28、図版18~20)

調査区西半でSR401・402、東半でSR403・404を検出した。西半に比べて東半の畦畔は遺存状況が悪かったが、畦畔はいずれも南北方向に延びていた。第4cii層の上面は調査区の東端でTP+8.1m、西端でTP+8.05~8.10mとほぼ水平である。作土中より黒色土器碗2が出土した。

畦畔間の間隔はSR401とSR402は21.0m、SR402とSR403は21.7m、SR403とSR404は3.5mであった。

SR401 幅0.44m、高さ0.10mであり、暗オリーブ灰色細粒砂~シルト(第4b層)や、灰オリーブ色極細粒砂~シルト(第4cii層)などの水成層で完全に埋りきっていた。

SR402 幅0.45m、高さ0.07mで、畦畔の西側はSK301によって切られていた。

SR403 幅0.50m、高さ0.08mであった。

SR404 幅0.35~0.85m、高さ0.05mであった。

b. 溝(図27・28、図版18)

SD401~404 調査区中央で検出した幅0.50m、深さ0.10mの溝である。溝底には幅5~10cm、長さ3~5cmの長方形の加工痕が規則正しく2列に並んでいた。埋土は灰オリーブ~褐色中粒砂で構成され、第4cii層に由来する5cm大の偽礫が多く含まれていた。

SD405~407 幅0.40m、深さ0.05~0.10mの溝である。SD406はSD405・407によって切られていた。埋土はラミナの明瞭な細粒砂であった。

vi) 中世後半期~近世の遺構と遺物(図27・29、図版21・28)

a. 各層検出の遺構(図27、図版21)

近世の作土である第3c層上面で島畠溝、第3b層下面で溝を検出した。

島畠溝1~6 第3bの作土層を除去したところで検出した。調査区中部で本来ならばNG02-1次調査地で検出した島畠溝4の続きを検出するはずであったが、重機掘削時に表土と共に除去したため、断面による確認にとどまった。また島畠溝3はSK302によって切られていた。

第4a層は調査区西半では南から北、東半では南南西から北北東へ向かって堆積が進行しており、調査区中央部で最も層厚が厚かった。この第4a層を掘った土砂を盛り上げて島畠を築いていた。盛りされた高まり部分は第3b層の耕作によって消滅していた。溝の部分はシルト混り粗粒砂で埋っていた。

SK301・302 ともに南北方向の土壌であり、島畠溝が埋没した上から掘込まれていた。NG02-1次調査地のSD301・302と一連の遺構である。いずれも幅約1.7m、深さ0.4~0.5mで、断面は逆台形であった。

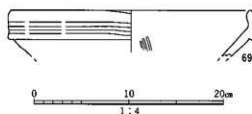


図29 島畠溝出土遺物

埋土は3層に細分され、上層は暗オリーブ灰色粘土からなり、水漬きの状態で堆積したものと思われる。中層は暗オリーブ灰~オリーブ灰色細~極粗粒砂であり、粘土~極細粒砂の偽礫を多く含んでいた。下層は暗オリーブ灰色極細~細粒砂からなる層厚0.1mの水成層であった。遺構の斜面や底面には鋤によるものとみ

られる加工痕が顕著であり、部分的にオーバーハングしていた。これらの特徴から両土壌が土取り穴である可能性が高い。

SD301~303 幅0.5~1.0m、深0.3mの溝である。作土である第3b層の土が溝内に入り、第3b層の耕作に伴うものとみられる。

b. 遺構出土の遺物(図29、図版28)

69は鳥島溝1から出土した備前焼播鉢である。口縁部は直に立上っており片口である。スリメは先端部分のみ遺存しており3条が認められる。口縁部の特徴から16世紀前半のものとみられる。

3)まとめ

本調査では縄文時代から江戸時代に至る各時代の遺構や遺物を検出した。主な成果を時代順に概括する。

弥生時代中期の遺構群は南隣のNG02-1次調査地に比べて遺構や遺物の密度が希薄になる状況が明らかとなった。調査地は「出戸自然堤防」の北東辺に当たるとみられ、高所部に分布する居住域と、斜面から低所部にかけて広がる墓域の中間に位置していた可能性が高い。

古墳時代中期から後期の小溝群はNG02-1次調査地と同様の南北方向のものと、南西-北東方向のものがあつた。これらの小溝群はその形状から畝間溝と考えられ、その後の自然科学分析でイネとムギの植物珪酸体が抽出されている。発達した古土壌で開けた草地であることは、花粉や珪藻の風化が著しく、前回以上の成果が期待されないため、花粉・珪藻・植物珪酸体分析は実施しなかった。

飛鳥~奈良時代の今回の調査で特筆すべき点は、この時代のものとみられる木簡削屑が出土したことである。長原遺跡におけるこの時期の木簡資料は、NG95-49次調査地で「米三石口斗五升」と書かれたものが出土したのに続いて2例目である[大阪市文化財協会2000b]。NG95-49次調査地で出土したものが荷札木簡であるのに対し、本調査地で発見されたものは木簡削屑であり、筆記作業の過程で生じたものとみられる。収穫された農作物を調査地近辺で記録・管理する作業が行われていた可能性が出てきたといえる。また、奈良~平安時代の遺構から出土した曲刀鎌も、当時の収穫の様子をうかがうための貴重な資料である。中世の遺構には、ほぼ正方位に延びる中世の水田畦畔や多くの踏込みがあつた。この水田は粗粒の砕屑物で埋没するものの、中世後半~近世において新たに設けられた鳥島はほぼ正方位に設けられており、土地利用の連続性がうかがえる。

次章において出土遺物を検討し周辺調査地との関係を整理しつつ、今回の調査成果の持つ意味を考察する。

第Ⅲ章 遺構と遺物の検討

第1節 NG04-3次調査地出土の動物骨同定

安部みき子 柴田佳奈
大阪市立大学大学院医学研究科
器官構築形態学(第2解剖)

1)はじめに

本節ではNG04-3次調査地において出土した動物骨の種類を同定し、性別・年齢・形質・外傷などの諸特徴について検討を行う。

当調査地の東で行われたNG01-14次調査では、奈良時代の流路からウシ・ウマ・イヌ・スッポンなどが出土した。とりわけウシには中手骨の変形が著しいものがあり、農作業などの激しい使役がなされたと推測されている。また、調査地の南で行われたNG02-8・03-6次調査成果から、古墳時代中期にはウマの数量が多いが、飛鳥・奈良時代になるとウシも多くなることが示されている。

また、出土状況についても興味深い事例が発掘調査成果から明らかにされている。南口古墳では古墳の周濠からウマの全身骨格がほぼ1体分出土した。このようなウマの全身骨格は四條畷市中野遺跡、同市郡屋北遺跡でも見つかっており、ウマの埋葬と考えられている。本調査地の北で実施されたNG03-5次調査では、木枠の痕跡内からウマの頭骨が出土し、古墳の裾部分に位置することから、ウマの埋葬と考えられている[辻美紀2005]。

ウシは飛鳥時代の土壌から、長骨類を並べて埋納したものがNG01-14次調査で見つかっており、ほぼ完全な全身骨格がNG01-14次調査のNR501から出土している。

長原遺跡ではこのようにウマ、ウシなどの動物遺存体に関するデータの蓄積が進められており、今回の動物骨の同定もこのようなデータの収集・報告が主な目的である。

本調査地で検出したNR501はNG01-14次調査で検出したNR501、NR701は同NR701に連続する。また、NR601は飛鳥時代から奈良時代の遺物が出土しておりNG01-14次調査で検出したNR501に先行する奈良時代の流路としている。

NG01-14次調査で検出したNR501からは上述したように動物骨の変形や、種の構成比率が明らかにされており、これと比較・検討するための資料提示として動物骨の同定を行った。

2)出土動物骨の同定

大阪市平野区に位置する長原遺跡の飛鳥～奈良時代の遺構から出土した動物遺存体のうち同定でき

たものは、スッポンとウシ、ウマの3種であった。

スッポン(R353)は肋骨板と椎骨板が交連した状態で出土した。約10cmと小さいことなどから、食されたとは考えにくい。

ウシは下顎骨と上顎の大白歯のみ同定できた。上顎第3大白歯が左右ともに2点出土していることから、最小個体数は2であった。また、下顎骨(R432-1)は右が遺存し、切歯部は破損していた。下顎骨の計測値を、吹田市五反鳥遺跡出土のウシ[茂原信生・桜井秀雄1996]と比較すると、臼歯長に関する計測部位は平均値によく似た値を示すが、下顎体高は本遺跡のほうが大きい値を示した。

ウマは頭骨と上顎の臼歯数点と髁骨や三角骨など前肢骨がみられる。頭骨(R352-1)は顔面頭蓋が破損し、脳頭蓋のみ遺存しており、土圧による歪みが大きいため計測はできなかった。遺存部位には頭骨を人工的に破損したような痕跡はなく、脳は摘出されていない。ウマの歯や四肢骨も保存状態はあまりよくなかったため、計測はできなかった。

今回出土した動物遺存体の保存状態が悪かったため、詳細な比較は今後の課題としたい。

表4 NG04-3次調査地時代別ウシ・ウマ骨数量

	ウマ	ウマ?	ウシ	出土遺構・層
古墳時代	1	0	0	第7a層
飛鳥～奈良時代	7	2	8	NR601
奈良時代	1	0	1	NR501

表5 NG04-3次調査地出土動物遺存体一覧表

京番号	層位	遺構名	出土位置	機名	左右	出土部位	図版・詳細・出土状況	計測値(mm)
353	6biii層	NR601		スポン		椎骨板と肋骨板	図版30	
129	5b層	NR501		ウシ		頰椎(中位)	図22	
432-1	6biii層	NR601		ウシ	右	下顎骨	図版29 図19	切歯部破損下顎角-第2小白歯間長238.79 下顎枝長101.3 5根白歯長137.70 小白歯長50.97大臼歯長87.75 下顎体高(M3後縁)81.22 下顎体高(M1前縁)52.33 下顎体高(P2前縁)38.85
332	6biii層	NR601	最下層	ウシ	左	上顎第2大臼歯	図19	近遠心径28.04 頰舌径22.75
327-1	6biii層	NR601	中層	ウシ	左	上顎第3大臼歯		近遠心径31.65 頰舌径23.31
389	6biii層	NR601		ウシ	左	上顎第3大臼歯		近遠心径28.12 頰舌径20.35
432-2	6biii層	NR601		ウシ	右	上顎第3大臼歯	図19	近遠心径32.15 頰舌径24.16
327-2	6biii層	NR601	中層	ウシ	右	上顎第3大臼歯		近遠心径27.64 頰舌径20.74
433-1	6biii層	NR601	頸骨付近	ウシ	左	上顎第4小白歯		近遠心径21.47 頰舌径17.03
352-1	6biii層	NR601		ウシ	-	肋骨	肋骨遺のみ、 断面直線破損 図版29	
67	6a層中		層中	ウマ	右	上顎第1切歯	図版30	近遠心径16.12頰舌径12.00
207	6biii層	NR501		ウマ	不明	下顎骨	下顎角周辺のみ	
340	6biii層	NR601	最下層	ウマ	不明	基節骨	図版30 図19	
351-1	6biii層	NR601		ウマ	右	上顎第2大臼歯	図版30	
195-1	6biii層	NR601	最下層	ウマ	右	上顎第1or2大臼歯	図版30	
345	6biii層	NR601	最下層	ウマ	左	中手骨	近位から骨幹約23cmまでの前部のみ遺存 図19	
429	6biii層	NR601		ウマ	左	腕骨	骨幹後面の尺骨癒合部から約20cm遺存 図19	
643-1	6biii層	NR601	埋土中	ウマ?	左	跗骨	白周辺のみ遺存	
643-3	6biii層	NR601	埋土中	ウマ?	-	胸椎(中位)		
226-1	6c層	NR602	層中	ウマ	左	上顎小白歯		
280	7a層		層中	ウマ	左	三角骨		
188	5b層	NR501		ウシorウマ	不明	長骨片	骨幹約25cm遺存	
189	5b層	NR501		ウシorウマ		長骨片	骨幹約10cm遺存	
375	6biii層	NR601	層中	ウシorウマ	不明	下顎骨	臼歯歯槽部のみ遺存 図19	
643-2	6biii層	NR601	埋土中	ウシorウマ	左	寛骨	腸骨翼のみ遺存	
434	6biii層	NR601		ウシorウマ	不明	肩甲骨		肩甲骨周辺約16cm遺存
131	5b層	NR501		大型哺乳類			骨片 関節部 図22	
127	5b層	NR501	最下層	哺乳類			骨片 関節部	
362	6biii-6b層		調査中	大型哺乳類	不明	下顎骨	骨片	
643-4	6biii層	NR601	埋土中	大型哺乳類			骨片	多数
337	6biii層	NR601	最下層	大型哺乳類	不明	長骨片	図19	多数
339	6biii層	NR601	最下層	大型哺乳類	不明			
195-2	6b層	NR601	最下層	大型哺乳類			骨片	
466	6d層	SD603	清底	大型哺乳類	不明	長骨片		骨幹の約16cm遺存
300	7b層	作土	層中	大型哺乳類			骨片 関節部	
201	7b層	作土	層中	哺乳類			骨片	

第2節 長原遺跡東北地区における歴史・地理的環境とNG04-3次調査地における土地利用の変化

1)はじめに

本節では周囲における既往の調査成果を踏まえつつ、NG04-3次調査地において検出した遺構の評価を行いたい。前章で報告したように、弥生時代中期に居住地であったが、古墳時代に耕作地と変わり、飛鳥・奈良時代に河道となる。この河川が埋没した後は近・現代に至るまで連綿と水田として土地利用されてきた。本節ではとりわけ土地利用の変化が著しかった弥生時代から古代にかけてを検討する。

2)弥生時代中期(図30・31)

本調査地で検出された遺構は溝や土壇であり、竪穴住居や柱穴や井戸などの遺構は認められなかったが、隣接するNG02-1次調査地では、河内Ⅳ様式の住居が2基と井戸1基が検出されている。SB801は直径7.5mに復元される円形プランの住居である。この住居跡のものとみられる排水溝SD805が北東に延びており、SX804-SX803を経て、本調査地のSD806へつながる。竪穴住居の排水溝が低所部に向って延びる状況はNG89-86次調査地SB01、NG99-15次調査地SB802などでも明らかにされている[大阪市文化財協会1990・2002b]。

また、NG02-1次調査地SB801の西側4mのところに3.4m×2.8mの長方形プランのSB802が位置する。円形のものよりも面積が小さく、柱穴・炉を持たない。この遺構はSB801の排水溝の続きであるSX804-SX803を切っているため、SB801より後に構築されたものといえる。NG02-1次調査地ではこれらの住居に隣接して井戸SE801も見つかっており、竪穴住居と井戸で一つの居住域が構成されていることがうかがえる。

この居住域の東側には南東から北西に溝SD802が延びており、この続きが本調査地で検出したSD802である。この一連の溝は、NG02-1・04-3次調査地において、これを切って設けられた遺構はなかったため、切合い関係を持たない遺構は別として、両調査地の諸遺構の中で最も新しいものであるといえる。

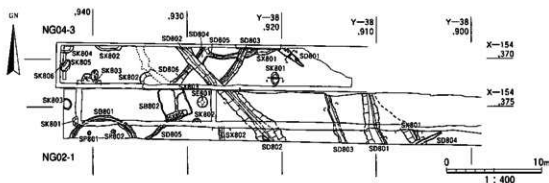


図30 弥生時代中期のNG04-3・NG02-1次調査地



長原遺跡東北地区の南に隣接する長原遺跡東地区では数多くの竪穴住居が検出されている。即ち、河内Ⅱ様式のものNG83-64・92-39次調査地、河内Ⅲ様式のものNG99-15次調査地、第Ⅳ様式のものNG87-67・89-86・02-8・03-6次調査地でそれぞれ見つかった。これらの調査地では竪穴住居以外にも土壌が隣接して設けられることが多い。

掘立柱建物は本調査地から北西180mの城山(その2)D地区において、2箇所で見つかった[大阪文化財センター1986b]。一つはD地区南端付近の掘立柱建物SB1102で、建物の周囲において井戸1基・土壌2基が検出されている。SB1102は1×3間で梁間3m、桁間1.1~1.2mと梁間が桁間に比べて長く、長い梁間を支える束柱をもたない。もう一つは調査区中ほどにあるSB1101で、建物の周囲において井戸2基・土壌1基が検出された。また、これらの遺構の西側には溝が南北に設けられており、それよりも西に遺構が認められないことから、建物や井戸のある場所を区画するためのものと考えられる。このSB1101もSB1102と同様、梁間が長いタイプの掘立柱建物である。倉庫か住居かといった建物の機能は不明であるが、建物と井戸で一つの居住域が構成されていることがうかがえる。

居住域に対して墓域は城山(その1)A地区・同C地区・NG03-5次調査地で見つかった[大阪文化財センター1986a・大阪市文化財協会2004c]。またNG83-1次調査地では、胴部最大径から上方にかけて焼成後穿孔を施した河内Ⅲ様式の広口壺が出土している。このような穿孔を施す土器は墳墓に供献されたものが多いことから、NG83-1次調査地周辺にも墓域が存在する可能性がある。

城山(その1)A地区では第Ⅲ様式からⅣ様式にかけての方形周溝墓39基が、C地区では河内Ⅱ様式の方形周溝墓3基がそれぞれ検出された。とりわけ城山(その1)A地区の墓域は広範囲に拡がっており、同時期に隆盛を極めた亀井遺跡に対応する墓域と考えられる。

NG02-1・04-3次調査地の北に隣接するNG03-5次調査地では河内Ⅳ-3様式の方形周溝墓が2基検出された[辻美紀2004]。1号墓は南北12m、東西8mと南北方向が長い長方形で、2号墓は南北11m、東西10mとほぼ正方形の墳丘であった。1号墓では木棺の痕跡、2号墓では土器棺が見つかった。NG02-1・04-3次調査地に隣接しており、時期が近いことから、NG03-5次調査地の墓域はNG02-1・04-3次調査地の居住域に対応する墓域と推測される。

長原遺跡東北地区南の長原遺跡東地区ではNG02-8次調査地南区において河内Ⅲ様式の方形周溝墓SX002と第Ⅳ様式中葉の方形周溝墓SX001が見つかった。後者と同じ時期の竪穴住居と土壌群が同調査地の西側で見つかり、墓域に対応する居住域とみられる。また、NG95-36次調査地では第Ⅳ様式後葉の方形周溝墓群が検出されている。同じ時期に存続する居住域が方形周溝墓群の北110mのNG03-6次調査地内で見つかり、やや離れているものの対応する可能性が高い。

これらの諸事例から調査地とその周辺において、居住域と墓域で構成される集落がいくつか認められることがうかがえる。長原遺跡の弥生時代中期の集落は、青銅器の鑄造関連遺物や銅鐸形土製品などの出土したNG03-6次調査地を除いて建物の重複する事例が少なく、竪穴住居の拡張もほとんど無いことが特徴であり、短期間のものが多いといえる。同じ場所で数次にわたる建物の建替えを余儀なくされるような密集度の高い拠点的な集落というよりも、小さな居住単位が南北700m、東西300

mの広い出戸堤防上において短期間に移動を繰返すといった状況が、長原遺跡の弥生時代中期集落において一般的であったと推測される。溝に囲まれた300m×150mの狭い範囲に数多くの建物が設けられ、青銅器生産をはじめとする様々な手工業生産が長期にわたって営まれた亀井遺跡が、調査地の北900mのところに位置しており、本調査地周辺の各集落は、亀井遺跡のような拠点集落周辺の分枝的なものの一つと考えられよう。

3)古墳時代中期(図32)

NG02-1次調査地に引き続き、TP+7.1~7.3mにかけて、畝間溝と考えられる小溝群SD7b01~7b27を検出した。NG02-1次調査地では溝の埋土について植物珪酸体分析を行い、イネの珪酸体と種実遺体、オオムギ族の珪酸体などが検出された[バリノ・サーヴェイ株式会社2005]。イネの珪酸体は水田のものと比べて明らかに少量であったため、イネの栽培を行っていたというよりも耕作に伴う資材として稲藁や籾殻を用いた可能性が指摘されている。また、オオムギ族については栽培の可能性はあるが、短細胞珪酸体の形状から栽培種か否かが特定できないとされている。このような小溝溝は、NG03-5次調査地や城山(その2)D地区南半でも見つかっている。

畝間溝に対して水田はNG01-14次調査地、城山(その2)D地区北半でそれぞれ検出されている。NG01-14次調査地ではTP+6.7~6.8mにおいて南南東-北北西に延びる畦畔が見つかっており、それらは12m間隔で設けられていた。城山(その2)D地区北半ではTP+6.9~7.3mにおいて一辺が5mの正方形の小区画水田が見つかっており、それらはほぼ正方位に設けられていた。同じ調査地でも北側のTP+7.3~7.5mでは畝間溝が分布しているため、やや高い場所では畝、低所部では水田といった土地利用の区分を行いながら、農業が盛んに営まれていたことがうかがえる。

同時期の居住域は長原遺跡東地区のNG95-36・99-15・02-8・03-6次調査地で見つかっており、そこに居住していた人々がこのような農業生産に主体的にかかわっていた可能性が高い。

4)飛鳥~奈良時代(図33・34)

今回の調査地では古墳時代後期から飛鳥~奈良時代の流路NR601と奈良時代の流路NR501が、重複しながら流れていることが明らかになった。このうち奈良時代のNR501はNG01-14次調査地NR501、NG02-1次調査地のNR501と一連のものである。この流路は上述のように粗粒の碎屑物で埋まっており、水流の早かったことがうかがえる。

この奈良時代の流路の続きは城山(その2)D地区の大溝SD0502とされてきた[村元健一2003b]。SD0502は幅11m以上、深さ0.6~1.0mで、埋土は緑灰色砂質シルトと貝を含む暗青色粘土の互層であった。埋土からは8世紀中葉から9世紀の土器が出土した他、ウマの骨・木屑が見つかっている。溝内堆積物がNR501に比べて細粒の碎屑物であること、平安時代の遺物を含むことを除けば、溝の規模や動物骨が出土するなど類似点が多い。

しかし、新たな調査によって別の流路につながる可能性が出てきている。2005年度に本調査地の西に隣接する場所でNG05-3次調査が行われ、古墳~飛鳥時代の氾濫性堆積層(13層)と奈良~平安

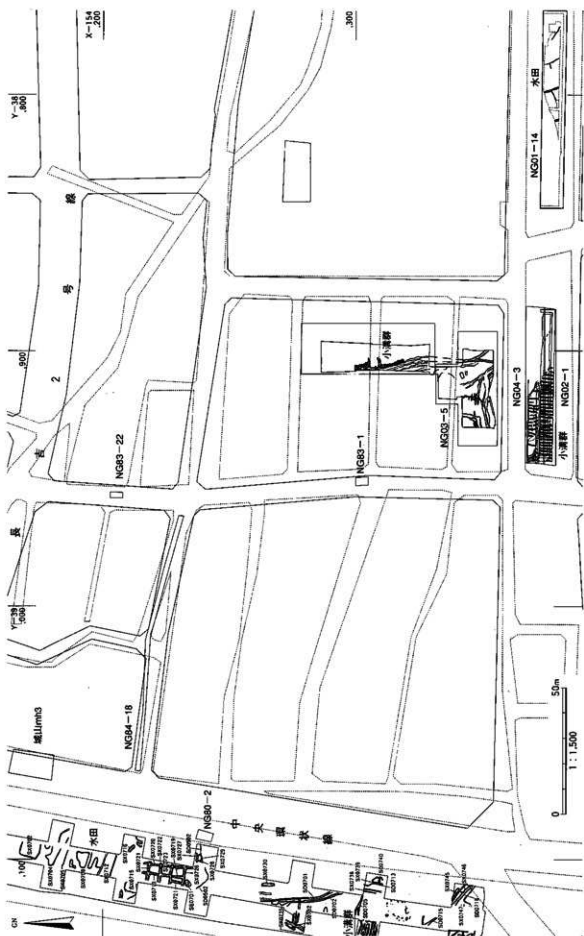
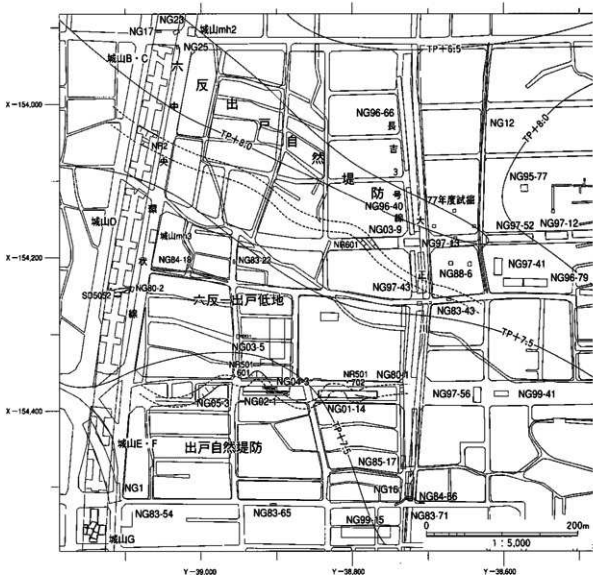


図32 古墳時代中期の長原遺跡東北地区西半の遺構分布図



時代の氾濫性堆積層(12層)が検出された【大阪市文化財協会2006b】。これらは調査地の西半で検出されており北東から南西方向に堆積していた。この調査地を経由しさらに西に蛇行しながら進み、城山(その2)D地区とE地区の間の未調査地部分を抜けて西へ流下した可能性を指摘しておきたい。

飛鳥～奈良時代のNR601はNG01-14次調査地NR701と一連のものである。NR501とほぼ重なって流れていることが特徴であり、NR501と同様に本調査地の北のNG03-5次調査地、西のNG05-3次調査を経由して、西へ流れていた可能性が考えられる。

長原遺跡東北地区から城山遺跡にかけての飛鳥時代の流路は、調査地の北西350mに城山(その1)A地区NR2、その120m北の城山(その1)AN地区にNR1がある。NR1は幅36m、深さ4.8mで、古墳時代前期後半から飛鳥時代にかけて機能していた。NR2は幅30m、深さ2.8mで飛鳥時代の土器が流路内から出土したほか、流路の堆積層から飛鳥Ⅱ・Ⅲの土器が出土しており、7世紀後半頃に埋没すると考えられている。いずれの流路も流路内堆積物は砂礫であり、強い水流があったことがうかがえる。

このNR2は東南東350mに位置するNG03-9次調査地NR601と一連のものである可能性が高い。NR601は幅27m、深さ1.2mで南東から北西方向に流れていた。出土する遺物から飛鳥～平安時代に機能していたことが明らかにされている。幅20mを超す大規模な流路であること、また、流路内が粗粒の碎屑物で埋積されることなど、NR2とNR601は共通点が多い。

NG03-9次調査地NR601、城山(その1)A地区NR2をつなげるとほぼそれが古墳時代中期から後期にかけて形成された六反自然堤防の南縁に当り、この自然堤防に沿って西に流下する河川と考えられる。

このように出戸自然堤防の北縁を西に流下する河川と、その北の六反自然堤防[高橋工1999]の南縁を西に流下する河川とがあり、いずれも飛鳥時代から奈良時代にかけて流れていたとみられる。

次に生産域について概観しよう。上で復元した二つの流路に囲まれた出戸-六反低地では、NG03-5次調査地で作土層が部分的に遺存していたが、畦畔や溝などは見つかっていない。ちなみに、飛鳥～奈良時代に対比されるNG6層は、NG83-1次調査地でTP+7.6～7.8m、NG83-22次調査地でTP+7.3～7.6mにかけて堆積している。NG04-3次調査地で検出したNR501の流路肩がTP+7.7mであるため、NR501より北の出戸-六反低地は高低差がほとんどなく、水に漬りやすい環境であったと考えられる。このような環境で水田経営を行うことは困難であったと想像される。

一方、調査地南の長原遺跡東地区では出戸自然堤防上に広範囲にわたって農地が広がっているようすが認められる。調査地の南東200mのNG99-15次調査地ではTP+7.5～7.8mのところを灌漑水路と畝間溝が見つかる。東西方向に灌漑水路(SD601)が掘られ、その北側では東西方向と西南西-東北東方向、南側では東西方向の畝間溝が設けられていた。溝から出土した土器は古墳時代後期から飛鳥Ⅱのものであり、古墳時代後期～飛鳥時代に耕作が営まれたとみられる。

調査地から南南東300mにあるNG03-6次調査地では、TP+8.0mで飛鳥Ⅱの東西方向の溝2条(SD060・062)が検出されている。畦畔は検出されていないが、両溝間には土作が分布し踏込みが顕著であったこと、また作土中からイネ属の花粉が多出したことから水田と考えられている。

NG03-6次調査地に南接し、調査地から南南東350mに位置するNG02-8次調査地では、TP+7.9～8.0mにかけて、飛鳥時代後半～奈良時代の南北方向の畝間溝が数多く検出されている。

NG02-8次調査地の南に位置するNG95-36次調査地ではTP+7.4～7.8mにかけて南東-北西方向に2条の溝(SD403・404)が11m間隔で掘られ、その間に南西から北東方向の畝間溝が設けられていた。

また、調査地南400mのNG89-86次調査地ではTP+7.5mで南東-北西方向の畝間溝が多数設けられ、その上のTP+7.6～8.0mにかけて奈良時代の水田が営まれていた。

このように調査地の南側ではNG99-15次調査地からNG89-86次調査地にかけて、南北300mにわたって畠を中心とした農地が広がっていたことがうかがえる。

この場所で農業生産を営んでいた人々の居住地について検討しよう。近隣の居住域は長原遺跡東北地区のNG83-22次調査地、長原遺跡中央区のNG82-4次調査地がある[高橋工1999]。NG83-22次調査地では遺構は検出されていないが、NG6層中から飛鳥時代の土師器・須恵器杯がまとまって出

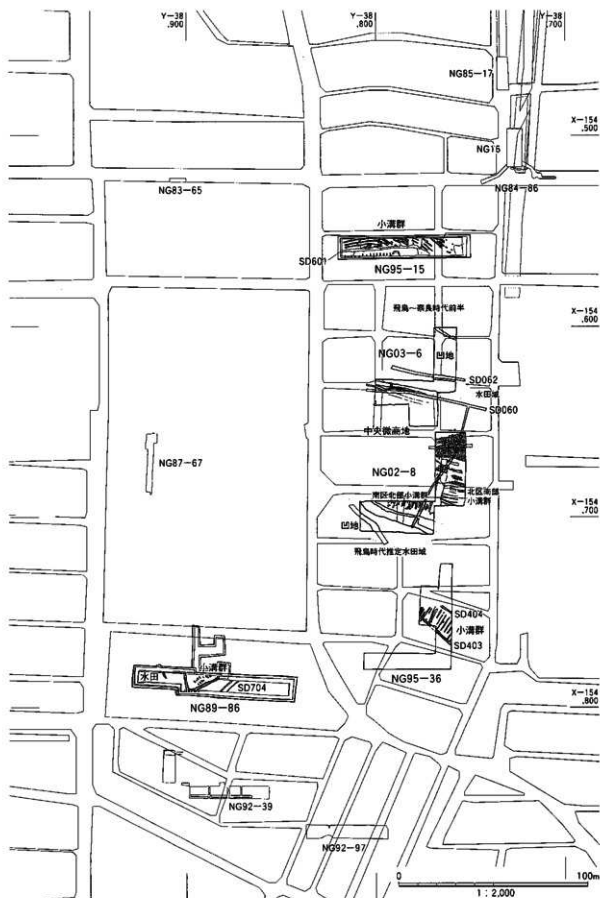


図34 飛鳥～奈良時代の長原遺跡東部地区の遺構分布図

土し、獣骨も見つかった。また、長原遺跡中央地区のNG82-4次調査地では、飛鳥時代前半の井戸2基とピットが検出されている。生産地に近いこれらの居住域の人々が、出戸自然堤防の生産域で日常的に農業生産を行っていた可能性が高いと思われる。

本調査地では河川の傍の飛鳥～奈良時代の粘土層から木簡削屑が出土したが、木簡に墨書された文字が付着した土に転写されることからうかがえるように、原位置性は非常に高い。木簡を削って修正されたのが「束」で数えられる数量であり農作物の可能性が高いことにも注目される。おそらく生産域を流れる河川の傍で生産物の種類と量が記録されていたのであろう。これらの生産物は官衙風の建物や倉庫が並び立つ瓜破遺跡や喜連東遺跡のような、律令国家が地域を支配するための中核的集落に集められていたのかもしれない。調査地において出土した木簡削屑は、当時の貢納システムを検討するための資料として評価できよう。

別 表

別表1 長原道雄東北地区の基岩順序

層序	層序 地層図	主たる岩相	層厚 (cm)	自然現象 自然現象はか	おもな遺構・遺物		型式地	N図序 との対応	時代
RC0層	現代寄土	現代寄土	10-20					1	近代・現代
RC1層	現代寄土	現代寄土	10-20					2	江戸
RC2層	現代寄土	現代寄土	10-20					3	室町・鎌倉
RC3層	現代寄土	現代寄土	10-20					4A	平安
RC4層	現代寄土	現代寄土	10-20					4B	平安
RC5層	現代寄土	現代寄土	10-20					5A・B・6A	奈良
RC6層	現代寄土	現代寄土	10-20					6B・7A	飛鳥
RC7層	現代寄土	現代寄土	10-20					7B	古墳時期
RC8層	現代寄土	現代寄土	10-20					7Bii	古墳前期
RC9層	現代寄土	現代寄土	10-20					7Biii	古墳後期
RC10層	現代寄土	現代寄土	10-20					7Biv	古墳後期
RC11層	現代寄土	現代寄土	10-20					7Bv	古墳後期
RC12層	現代寄土	現代寄土	10-20					7Bvi	古墳後期
RC13層	現代寄土	現代寄土	10-20					7Bvii	古墳後期
RC14層	現代寄土	現代寄土	10-20					7Bviii	古墳後期
RC15層	現代寄土	現代寄土	10-20					7Bix	古墳後期
RC16層	現代寄土	現代寄土	10-20					7Bx	古墳後期
RC17層	現代寄土	現代寄土	10-20					7By	古墳後期
RC18層	現代寄土	現代寄土	10-20					7Bz	古墳後期
RC19層	現代寄土	現代寄土	10-20					7Bzi	古墳後期
RC20層	現代寄土	現代寄土	10-20					7Bzii	古墳後期
RC21層	現代寄土	現代寄土	10-20					7Bziii	古墳後期
RC22層	現代寄土	現代寄土	10-20					7Bziv	古墳後期
RC23層	現代寄土	現代寄土	10-20					7Bzvi	古墳後期
RC24層	現代寄土	現代寄土	10-20					7Bzvii	古墳後期
RC25層	現代寄土	現代寄土	10-20					7Bzviii	古墳後期
RC26層	現代寄土	現代寄土	10-20					7Bzix	古墳後期
RC27層	現代寄土	現代寄土	10-20					7Bzy	古墳後期
RC28層	現代寄土	現代寄土	10-20					7Bzii	古墳後期
RC29層	現代寄土	現代寄土	10-20					7Bziii	古墳後期
RC30層	現代寄土	現代寄土	10-20					7Bziv	古墳後期
RC31層	現代寄土	現代寄土	10-20					7Bzvi	古墳後期
RC32層	現代寄土	現代寄土	10-20					7Bzvii	古墳後期
RC33層	現代寄土	現代寄土	10-20					7Bzviii	古墳後期
RC34層	現代寄土	現代寄土	10-20					7Bzix	古墳後期
RC35層	現代寄土	現代寄土	10-20					7Bzy	古墳後期
RC36層	現代寄土	現代寄土	10-20					7Bzii	古墳後期
RC37層	現代寄土	現代寄土	10-20					7Bziii	古墳後期
RC38層	現代寄土	現代寄土	10-20					7Bziv	古墳後期
RC39層	現代寄土	現代寄土	10-20					7Bzvi	古墳後期
RC40層	現代寄土	現代寄土	10-20					7Bzvii	古墳後期
RC41層	現代寄土	現代寄土	10-20					7Bzviii	古墳後期
RC42層	現代寄土	現代寄土	10-20					7Bzix	古墳後期
RC43層	現代寄土	現代寄土	10-20					7Bzy	古墳後期
RC44層	現代寄土	現代寄土	10-20					7Bzii	古墳後期
RC45層	現代寄土	現代寄土	10-20					7Bziii	古墳後期
RC46層	現代寄土	現代寄土	10-20					7Bziv	古墳後期
RC47層	現代寄土	現代寄土	10-20					7Bzvi	古墳後期
RC48層	現代寄土	現代寄土	10-20					7Bzvii	古墳後期
RC49層	現代寄土	現代寄土	10-20					7Bzviii	古墳後期
RC50層	現代寄土	現代寄土	10-20					7Bzix	古墳後期
RC51層	現代寄土	現代寄土	10-20					7Bzy	古墳後期
RC52層	現代寄土	現代寄土	10-20					7Bzii	古墳後期
RC53層	現代寄土	現代寄土	10-20					7Bziii	古墳後期
RC54層	現代寄土	現代寄土	10-20					7Bziv	古墳後期
RC55層	現代寄土	現代寄土	10-20					7Bzvi	古墳後期
RC56層	現代寄土	現代寄土	10-20					7Bzvii	古墳後期
RC57層	現代寄土	現代寄土	10-20					7Bzviii	古墳後期
RC58層	現代寄土	現代寄土	10-20					7Bzix	古墳後期
RC59層	現代寄土	現代寄土	10-20					7Bzy	古墳後期
RC60層	現代寄土	現代寄土	10-20					7Bzii	古墳後期
RC61層	現代寄土	現代寄土	10-20					7Bziii	古墳後期
RC62層	現代寄土	現代寄土	10-20					7Bziv	古墳後期
RC63層	現代寄土	現代寄土	10-20					7Bzvi	古墳後期
RC64層	現代寄土	現代寄土	10-20					7Bzvii	古墳後期
RC65層	現代寄土	現代寄土	10-20					7Bzviii	古墳後期
RC66層	現代寄土	現代寄土	10-20					7Bzix	古墳後期
RC67層	現代寄土	現代寄土	10-20					7Bzy	古墳後期
RC68層	現代寄土	現代寄土	10-20					7Bzii	古墳後期
RC69層	現代寄土	現代寄土	10-20					7Bziii	古墳後期
RC70層	現代寄土	現代寄土	10-20					7Bziv	古墳後期
RC71層	現代寄土	現代寄土	10-20					7Bzvi	古墳後期
RC72層	現代寄土	現代寄土	10-20					7Bzvii	古墳後期
RC73層	現代寄土	現代寄土	10-20					7Bzviii	古墳後期
RC74層	現代寄土	現代寄土	10-20					7Bzix	古墳後期
RC75層	現代寄土	現代寄土	10-20					7Bzy	古墳後期
RC76層	現代寄土	現代寄土	10-20					7Bzii	古墳後期
RC77層	現代寄土	現代寄土	10-20					7Bziii	古墳後期
RC78層	現代寄土	現代寄土	10-20					7Bziv	古墳後期
RC79層	現代寄土	現代寄土	10-20					7Bzvi	古墳後期
RC80層	現代寄土	現代寄土	10-20					7Bzvii	古墳後期
RC81層	現代寄土	現代寄土	10-20					7Bzviii	古墳後期
RC82層	現代寄土	現代寄土	10-20					7Bzix	古墳後期
RC83層	現代寄土	現代寄土	10-20					7Bzy	古墳後期
RC84層	現代寄土	現代寄土	10-20					7Bzii	古墳後期
RC85層	現代寄土	現代寄土	10-20					7Bziii	古墳後期
RC86層	現代寄土	現代寄土	10-20					7Bziv	古墳後期
RC87層	現代寄土	現代寄土	10-20					7Bzvi	古墳後期
RC88層	現代寄土	現代寄土	10-20					7Bzvii	古墳後期
RC89層	現代寄土	現代寄土	10-20					7Bzviii	古墳後期
RC90層	現代寄土	現代寄土	10-20					7Bzix	古墳後期
RC91層	現代寄土	現代寄土	10-20					7Bzy	古墳後期
RC92層	現代寄土	現代寄土	10-20					7Bzii	古墳後期
RC93層	現代寄土	現代寄土	10-20					7Bziii	古墳後期
RC94層	現代寄土	現代寄土	10-20					7Bziv	古墳後期
RC95層	現代寄土	現代寄土	10-20					7Bzvi	古墳後期
RC96層	現代寄土	現代寄土	10-20					7Bzvii	古墳後期
RC97層	現代寄土	現代寄土	10-20					7Bzviii	古墳後期
RC98層	現代寄土	現代寄土	10-20					7Bzix	古墳後期
RC99層	現代寄土	現代寄土	10-20					7Bzy	古墳後期
RC100層	現代寄土	現代寄土	10-20					7Bzii	古墳後期

[illegible]

村元健一 2003a [高橋工・杉本厚典・大庭重信・絹川一徳 1999] を一部修正) より

別表2 長原遺跡の標準層序

層序	層序 図例	岩 類	層厚 (cm)	自然現象 自然物ほか	おもな遺構・遺物	C14年代	時 代
最上層	NG1層	埋没土					近世
	NG2層	埋没土	15-20			1,400	近世
	NG3層	含腐植土・黒色シルト質砂	6-10		土器類・漆器類 土器類・漆器類		縄文
	NG4層	含腐植土・黒色シルト質砂	12-20		土器類・漆器類 土器類・漆器類		縄文
	NG5層	含腐植土・黒色シルト質砂	8-11		土器類・漆器類 土器類・漆器類		縄文
	NG6層	埋没土	20-20		土器類・漆器類 土器類・漆器類		縄文
	NG7層	埋没土	20-20		土器類・漆器類 土器類・漆器類		縄文
	NG8層	埋没土	20-20		土器類・漆器類 土器類・漆器類		縄文
	NG9層	埋没土	20-20		土器類・漆器類 土器類・漆器類		縄文
	NG10層	埋没土	20-20		土器類・漆器類 土器類・漆器類		縄文
	NG11層	埋没土	20-20		土器類・漆器類 土器類・漆器類		縄文
	NG12層	埋没土	20-20		土器類・漆器類 土器類・漆器類		縄文
	NG13層	埋没土	20-20		土器類・漆器類 土器類・漆器類		縄文
	NG14層	埋没土	20-20		土器類・漆器類 土器類・漆器類		縄文
	NG15層	埋没土	20-20		土器類・漆器類 土器類・漆器類		縄文
	NG16層	埋没土	20-20		土器類・漆器類 土器類・漆器類		縄文
	NG17層	埋没土	20-20		土器類・漆器類 土器類・漆器類		縄文
	NG18層	埋没土	20-20		土器類・漆器類 土器類・漆器類		縄文
中層	NG19層	埋没土	20-20		土器類・漆器類 土器類・漆器類		縄文
	NG20層	埋没土	20-20		土器類・漆器類 土器類・漆器類		縄文
	NG21層	埋没土	20-20		土器類・漆器類 土器類・漆器類		縄文
	NG22層	埋没土	20-20		土器類・漆器類 土器類・漆器類		縄文
	NG23層	埋没土	20-20		土器類・漆器類 土器類・漆器類		縄文
	NG24層	埋没土	20-20		土器類・漆器類 土器類・漆器類		縄文
	NG25層	埋没土	20-20		土器類・漆器類 土器類・漆器類		縄文
	NG26層	埋没土	20-20		土器類・漆器類 土器類・漆器類		縄文
	NG27層	埋没土	20-20		土器類・漆器類 土器類・漆器類		縄文
	NG28層	埋没土	20-20		土器類・漆器類 土器類・漆器類		縄文
	NG29層	埋没土	20-20		土器類・漆器類 土器類・漆器類		縄文
	NG30層	埋没土	20-20		土器類・漆器類 土器類・漆器類		縄文
	NG31層	埋没土	20-20		土器類・漆器類 土器類・漆器類		縄文
	NG32層	埋没土	20-20		土器類・漆器類 土器類・漆器類		縄文
	NG33層	埋没土	20-20		土器類・漆器類 土器類・漆器類		縄文
	NG34層	埋没土	20-20		土器類・漆器類 土器類・漆器類		縄文
	NG35層	埋没土	20-20		土器類・漆器類 土器類・漆器類		縄文
	NG36層	埋没土	20-20		土器類・漆器類 土器類・漆器類		縄文
下層	NG37層	埋没土	20-20		土器類・漆器類 土器類・漆器類		縄文
	NG38層	埋没土	20-20		土器類・漆器類 土器類・漆器類		縄文
	NG39層	埋没土	20-20		土器類・漆器類 土器類・漆器類		縄文
	NG40層	埋没土	20-20		土器類・漆器類 土器類・漆器類		縄文
	NG41層	埋没土	20-20		土器類・漆器類 土器類・漆器類		縄文
	NG42層	埋没土	20-20		土器類・漆器類 土器類・漆器類		縄文
	NG43層	埋没土	20-20		土器類・漆器類 土器類・漆器類		縄文
	NG44層	埋没土	20-20		土器類・漆器類 土器類・漆器類		縄文
	NG45層	埋没土	20-20		土器類・漆器類 土器類・漆器類		縄文
	NG46層	埋没土	20-20		土器類・漆器類 土器類・漆器類		縄文
	NG47層	埋没土	20-20		土器類・漆器類 土器類・漆器類		縄文
	NG48層	埋没土	20-20		土器類・漆器類 土器類・漆器類		縄文
	NG49層	埋没土	20-20		土器類・漆器類 土器類・漆器類		縄文
	NG50層	埋没土	20-20		土器類・漆器類 土器類・漆器類		縄文
	NG51層	埋没土	20-20		土器類・漆器類 土器類・漆器類		縄文
	NG52層	埋没土	20-20		土器類・漆器類 土器類・漆器類		縄文
	NG53層	埋没土	20-20		土器類・漆器類 土器類・漆器類		縄文
	NG54層	埋没土	20-20		土器類・漆器類 土器類・漆器類		縄文

※：上層出土遺構・下層出土遺構・中層出土遺構・C14年代・土 土

【資料出典】 2001 年一部加筆

引用・参考文献

- 大阪市教育委員会・難波宮址顕彰会1978、『Ⅳ 長吉六反(推定・城山古墳跡)試掘調査』：『平野遺跡群試掘調査報告書』、pp.12-16
- 大阪市文化財協会 1978、『長原遺跡発掘調査報告』
- 1979a、『大阪市下水道管渠工事に伴う平野区所在遺跡発掘調査(NG12次)報告書』
- 1979b、『大阪市下水道発進口建設工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG16次)報告書』
- 1979c、『関西電力管路埋設工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG17)略報』
- 1980、『大阪市下水管渠築造工事(到達竅穴)に伴う長原遺跡発掘調査計画書』
- 1981a、『大阪市下水管渠築造工事(押込口)に伴う長原遺跡発掘調査(NG80-1)略報』
- 1981b、『八尾～富田林局間同軸ケーブル方式工事(土木)に伴う長原遺跡発掘調査(NG80-2)略報』
- 1982、『長原遺跡発掘調査報告』Ⅱ
- 1984a、『下水工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG83-1)略報』
- 1984b、『大阪市住宅供給公社長原六反用地ボーリング調査(NG83-5)略報』
- 1984c、『大阪市平野区長吉出戸における下水道工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG83-22)略報』
- 1984d、『大阪市出戸六反地区幹線下水管渠築造工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG83-43)略報』
- 1984e、『仲東産業店舗建設に伴う長原遺跡発掘調査(NG83-54)略報』
- 1984f、『吉内邸新築工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG83-63)略報』
- 1984g、『関西電力管路新設工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG83-65)略報』
- 1985a、『六反下水管渠推進工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG84-4)略報』
- 1985b、『長吉出戸地区下水管渠築造工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG84-18)略報』
- 1985c、『地中送電線工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG84-49)略報』
- 1985d、『関西電力管路新設工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG84-86)略報』
- 1986、『大阪市土木局カルポート建設に伴う長原遺跡発掘調査(NG85-17)略報』
- 1988、『長吉中学校増築に伴う長原遺跡発掘調査(NG87-67)略報』
- 1989、『(株)ビーバーハウスによる建設工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG88-6)略報』
- 1990、『長吉長原東市営住宅建設に伴う長原遺跡発掘調査(NG89-86)略報』
- 1993、『長吉長原東市営住宅(第2期)建設に伴う長原遺跡発掘調査(NG92-39)略報』
- 1996、『大阪市都市整備局による長吉長原東住宅建設工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG95-36)略報』
- 1996、『大阪市教育委員会によるクラフトパーク建設に伴う長原遺跡発掘調査(NG95-77)略報』
- 1997、『平成8年度大阪市都市整備局による長吉六反第1住宅建設に伴う長原遺跡発掘調査(NG96-79)略報』
- 1998a、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅰ
- 1998b、『平成9年度大阪市都市整備局による長吉六反第1住宅建設工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG97-41)完了報告書』
- 1999、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅱ
- 2000a、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅲ
- 2000b、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』ⅩⅤ
- 2001、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅳ

- 2002a、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』V
- 2002b、『長原遺跡発掘調査報告』Ⅷ
- 2003a、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』V
- 2003b、『平成14年度大阪市住宅局による長吉六反住宅建設工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG02-9)完了報告書』
- 2004a、『長原遺跡発掘調査報告』Ⅺ
- 2004b、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅷ
- 2004c、『平成15年度大阪市住宅局による長吉出戸南住宅工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG03-5)完了報告書』
- 2005a、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅷ
- 2005b、『長原遺跡発掘調査報告』Ⅺ
- 2006a、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅸ
- 2006b、『平成17年度長吉東部地区土地区画整理事業施行に伴う長原遺跡発掘調査その2(NG05-3)完了報告書』
- 2006c、『長原遺跡発掘調査報告』XV
- 大阪文化財センター1980、『亀井・城山』
- 1986a、『城山(その1)』
- 1986b、『城山(その2)』
- 1986c、『城山(その3)』
- 茂原信生・桜井秀雄1996、『吹田市五反田遺跡出土の獣骨』：吹田市教育委員会編『吹田市五反田遺跡発掘調査報告』自然科学編、pp.63-107
- 佐藤隆1992、『平安時代における長原遺跡の動向』：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』V、pp.102-114
- 杉本厚典2003、『八尾南・長原・城山遺跡における集落構成の変化―弥生時代から古墳時代にかけての地域社会の一端―』：大阪市文化財協会編『大阪歴史博物館研究紀要』第2号、pp.31-72
- 鈴木秀典1982、『瓦器碗の編年』：大阪市文化財協会編『長原遺跡発掘調査報告』Ⅱ、pp.278-287
- 関根真隆1969、『奈良朝食生活の研究』吉川弘文館
- 古代の土器研究会1992、『都城の土器集成』I
- 小山正忠・竹原秀雄1996、『新版 標準土色帳』日本色研事業株式会社
- 高橋工1999、『長原遺跡および北部周辺地域における古墳時代中期～飛鳥時代の地形環境の変化と集落の動態』：大阪市文化財協会編『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅱ、pp.79-106
- 高橋工・杉本厚典・相川一徳・大庭重信1999、『長原遺跡東北地区の基本層序』：大阪市文化財協会編『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅱ、pp.7-16
- 田辺昭三1981、『須恵器大成』角川書店
- 辻美紀2004、『二つの方形周溝墓』：『葦火』108号、p.2-3
- 2005、『ウマを納めた穴』：『葦火』114号、p.5
- 寺沢庶・森井貞雄1989、『河内地域』：『弥生土器の様式と編年 近畿編Ⅰ』木耳社、pp.41-146
- 趙哲済1995、『本書で用いる層位学的・堆積学的視点からの用語』：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅷ、pp.41-44
- 2001、『長原遺跡の地層』：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅺ、pp.7-28
- パリオ・サーヴェイ株式会社2005、『NG02-1次調査地に関する古環境の検討』：大阪市文化財協会編『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅷ、pp.57-87

- 宮路淳子・松井章2004、「長原遺跡(NG01-14次)調査出土の動物遺存体について」：大阪市文化財協会編『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅴ、pp.55-69
- 村元健一2003a、「長原遺跡東北地区の基本層序」：大阪市文化財協会編『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅴ、pp.9-18
- 2003b、「長原遺跡とその周辺における古代の様相」：大阪市文化財協会編『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅴ、pp.86-100
- 八尾市文化財調査研究会、2000a、「Ⅴ 太子堂遺跡第7次調査(TS97-7)」：『(財)八尾市文化財調査研究会報告』66、pp.59-73
- 2000b、「Ⅵ 太子堂遺跡第8次調査(TS98-8)」：『(財)八尾市文化財調査研究会報告』66、pp.75-93

あ　と　が　き

長原遺跡東北地区発掘調査のシリーズは本書をもって第10冊となる。旧石器時代から近世に至る歴史や人間をとりまく自然環境を明らかにするために、沖積地を地下深くまで掘下げ、綿密な調査・記録を行ってきた。こうした成果を報告書としてまとめ、継続的に刊行できるのも関係各位の尽力の賜物である。

今回の調査地では長原遺跡東北地区の調査ではじめて木簡が出土したことが特筆される。木簡の削り屑は書いた文字を訂正するために木簡本体から削り取られるもので、「束」の文字から、まさしくこの場所で何らかの生産物がまとめられ、記録・管理されていたことが知られるのである。今後、得られた成果を社会に還元できるよう、さらなる努力を行いたい。

(松尾信裕)

索引

索引は遺構・遺物に関する用語と地名・遺跡名などの固有名詞とに分割して収録した。

〈遺構・遺物に関する用語〉

- T TG232～ON231型式 13
 あ 飛鳥Ⅱ 9, 29, 47, 48
 飛鳥Ⅲ 47
 い 生駒西麓産 13, 21
 石庖丁 11, 13
 井戸 3, 42, 44, 50
 う ウシ 3, 39, 40
 白玉 3
 畝間溝 6, 11, 23, 37, 45, 48
 ウマ 3, 39, 40, 45
 ウマの埋葬 3, 39
 瓜破遺跡 50
 え 円盤充填 21
 か 下顎骨 40
 滑石製勾玉 2
 河内型壺 21
 河内Ⅱ様式 44
 河内Ⅲ様式 21, 44
 河内Ⅳ様式 21, 42
 き 喜連東遺跡 50
 け 畦畔 6, 7, 35, 36, 37, 45, 48
 こ 黒色土器 7, 11, 36
 さ 削器 2
 砂眼 16
 し 櫓 2
 住居跡 3, 42
 獣骨 48
 重弧文軒平瓦 3
 初期須恵器 11
 人面墨瀝土器（墨瀝土器） 3, 8, 30, 32, 35
 す 水田 2, 3, 7, 37, 42, 45, 48
 龜溝 3
 スッポン 39, 40
 せ 製塩土器 30
 石鏃 11, 13, 14, 21
 石器製作址 2
 穿孔 13, 44
 そ 束 14, 37, 44, 50
 た 竪穴住居 42, 44
 丹波焼 7
 ち チップ 14, 19
 紡造関連遺物 44
 て 鉄鏃 8, 30, 37
 手捏ね 28
 と 銅鐸形土製品 44
 土器集積 3, 19
 土器集中部 3
 土製勾玉 3
 な ナイフ形石器 2
 長原式 11, 13
 は 排水溝 42
 羽釜 13
 剥片 2, 11, 14, 19
 鳥 6, 7, 11, 23, 36, 37, 45, 48
 ひ 肥前陶器焼 7, 11
 備前焼 37
 ふ 踏込み 7, 30, 35, 37, 48
 布留式土器 11
 噴砂 16
 へ 平城宮土器Ⅰ 32
 ほ 掘立柱建物 2, 44
 み ミニチュア 3, 8, 26, 28, 29, 32
 も 木簡 37, 50
 木簡削屑 8, 14, 28, 37, 50
 盛土遺構 2
 や 弥生土器 11, 14, 23
 り 緑色片岩 13
 ろ 炉 3, 42
 わ 和同開珎 3

〈地名・遺跡名など〉

あ	跡部遺跡	2
お	老原遺跡	2
か	亀井遺跡	44, 45
き	木の本遺跡	2
こ	五反鳥遺跡	40
し	蕨屋北遺跡	39
	城山遺跡	2, 47

た	太子堂遺跡	2
な	中野遺跡	39
	長原遺跡	1, 2, 3, 11, 37, 39, 42, 44, 45, 47, 48
み	南口古墳	39

**Archaeological Report
of the
Eastern Sector of Nagahara Site
in Osaka, Japan**

Volume X

**A Report of Excavation
Prior to the Development of the Eastern Sector of the Nagayoshi Area
in fiscal 2004**

March 2007

Osaka City Cultural Properties Association

Notes

The following symbols are used to represent archaeological features, and others, in this text

SB : Building

SD : Ditch

SE : Well

SK : Pit

SP : Posthole

SX : Other features

NR: Natural Stream

CONTENTS

Foreword

Explanatory Notes

Chapter I Excavation of northeastern sector of the Nagahara site	1
S.1 Background of researches and Location	1
1) Location of the Nagahara site	1
2) Former research results	2
S.2 Progress and outline of research	6
Chapter II Results of research	7
S.1 NG04-3	7
1) Standard Stratigraphy and Finds	7
i) Standard Stratigraphy ii) Finds from each stratum	
2) Features and finds	14
i) The Yayoi Period	
ii) The Kofun Period	
iii) From the Late Kofun to Nara Period	
iv) From the Nara to Heian Period	
v) The Medieval age	
vi) From the Late Medieval Period to the early modern age	
3) Conclusion	37
Chapter III Examination of features and finds	39
S.1 Identification of animal remains	39
1) Introduction	39
2) Results	39
S.2 Changes of land use at NG04-3 and geographical and historical environment in northeastern sector of Nagahara Site	42
1) Introduction	42
2) The Middle Yayoi Period	42
3) The Middle Kofun Period	45
4) From the Asuka Period to the Nara Period	45
References and Bibliography	55

Postscript and Index

English Contents and Summary

Reference Card

ENGLISH SUMMARY

Outline of the investigation

In this volume, we report results of the excavation at the northeastern sector of the Nagahara site in fiscal 2004 prior to the land rezoning in Eastern Nagayoshi, located in the southeast of Osaka City, Japan. Excavation NG04-3 was carried out between September and following January, covering 300 square meters.

Results of the investigation

1. The Middle Yayoi Period

The archaeological features of the Middle Yayoi Period consisted of pits and ditches. Some ditches continued to the ditches and drain ditch of the pit-dwelling discovered at NG02-1 area.

Two square tombs with moat were found north of NG04-3. This investigation area was a settlement consisted of dwelling area and graveyard of the middle Yayoi period.

2. The Kofun Period

A cluster of small ditches from the Middle Kofun Period was found as well as NG02-1. Following the results of combined analysis of diatom, opal phytoliths, pollen and seeds carried out at NG02-1, the function of the ditches is assumed including a possibility of the 'dry' cultural or horticultural fields.

3. From the Asuka Period to the Nara Period

Natural rivers, which seemed to be part of the same stream as the one excavated at neighbouring trench (NG01-14, NG02-1 and NG03-5), were found. A large quantity of pottery and animal bones were unearthed from the river.

The cutting rubbish of the wooden tablet written "a bunch of fifteen" (十五束) was unearthed. This is an important evidence of management of farm products by an ancient reeve.

報 告 書 抄 録

ふりがな	ながはらいせきとうぶちくはつつちようさほうこく10							
書名	長原遺跡東部地区発掘調査報告X							
副書名	2004年度大阪市長吉東部地区土地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	杉本厚典・安部みき子・柴田佳奈							
編集機関	財団法人 大阪市文化財協会							
所在地	〒540-0006 大阪市中央区法円坂1-1-35 TEL 06-6943-6833							
発行年月日	西暦 2007年3月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ながはらいせき 長原遺跡	おおさかしひらのく 大阪市平野区 ながはらいせき 長吉出戸	27126	—	34° 36′ 15″	135° 34′ 25″	040906~050308	300㎡	長吉東部地区土地区画 整理事業
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		
長原遺跡	集落	弥生時代		溝・土壌		弥生土器（河内Ⅳ様式）・石鏃・石廬丁		
	田畑	古墳時代		溝群		須恵器		
	その他	飛鳥～奈良時代		流路		土師器・須恵器・木簡削屑・動物骨		
		平安～鎌倉時代		水田		黒色土器		
		室町～江戸時代		島畠・耕作溝・溝		肥前陶器・備前焼		

圖 版

調査区西部
第3b～4c層
(東北東から)



調査区西部
南壁第3b～4c層
(北東から)



調査区東部
南壁第4a～c層
(北西から)





調査区東部
第4c～6aix層
(北西から)

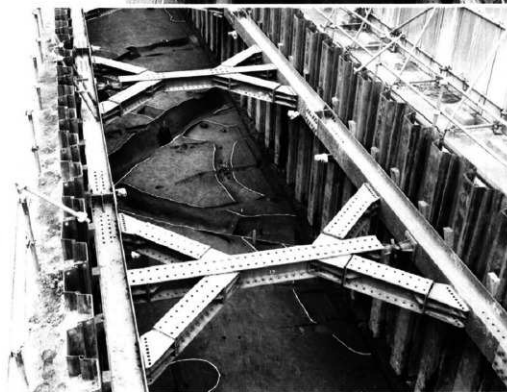


調査区東壁
第6ai～6d層
(西から)



調査区西壁
第8a・b層に貫入する
噴砂
(東から)

第8層の遺構
(東から)



第8層の遺構(東南東から)



SD803(北東から)



SD803断面(南西から)

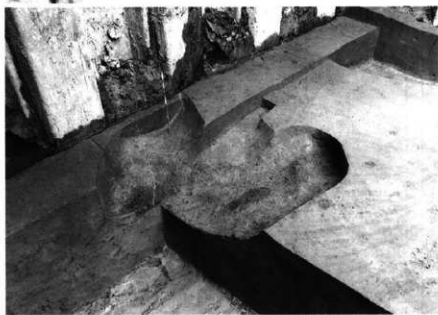


SD802断面(南東から)

SK804
(南東から)

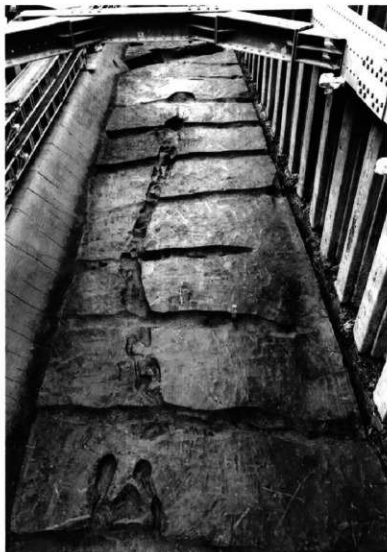


SK805・806
(南東から)

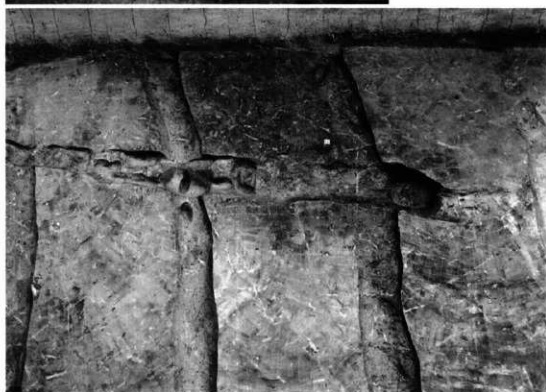


SK803
(北から)





第7b層上面の溝群(東から)



SD7b22・7b23完掘状況(北から)



SD7a03検出状況(西から)



SD7a03完掘状況(西から)



NR701(東南東から)



SD7a01~7a03(東から)



SD7a03(北から)

NR701(第7a層)
～第6biii層
遺物出土状況
(南から)



SD605(北西から)



SD603上面土器出土
状況(北東から)





NR601遺物出土状況
(西から)



NR601断面(北西から)



NR601動物骨出土状況(北から)



NR601杭出土状況(北東から)

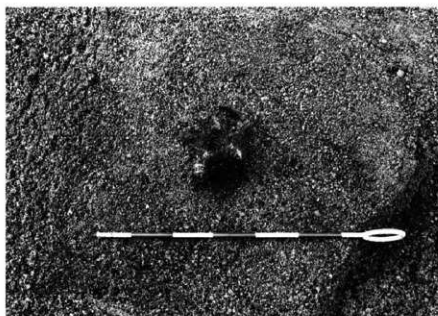


NR501(東から)



NR501断面(北西から)

NR501動物骨出土
状況(北から)



NR501遺物出土
状況(南西から)



NR501遺物出土
状況(北から)





SD601検出状況
(南東から)



SD601断面
(南東から)



SD601完掘状況
(北西から)

SD501・SK501・
SK502・SP501
(南から)



SD501断面
(南東から)



SD501遺物
出土状況
(北東から)



第4c層の遺構(東から)



SR401と水田面(東から)

SR401 (北から)



SR401と水田面(東から)



SR401断面(南から)



SR402断面(北から)

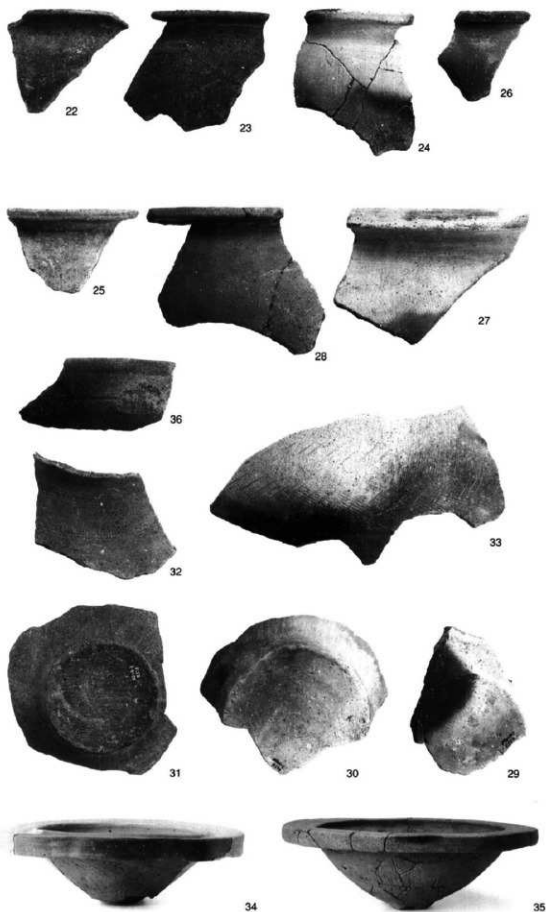


SR401東側の水田面
(第4ci層上面)
検出踏込み
(北西から)

島倉溝 1～3
(東から)



SK301・302(南から)



土器集積(25・27・28・31)、SX801(26・36)、SX802(29)、SD805(22・23・24・33・35)、SD806(32)、SK803(30・34)



41



42





43



44



46



45



38



39



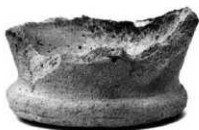
40



49



48



51



52



53



57



56



47



50



54



58



59



65



64



63



66



60



61



67



62



68



69

NR501(59~67)、SD501(68)、島高溝1(69)



上面

R352-1



下面

R352-1



後面

1 : 3

R352-1



R432-1
外側面

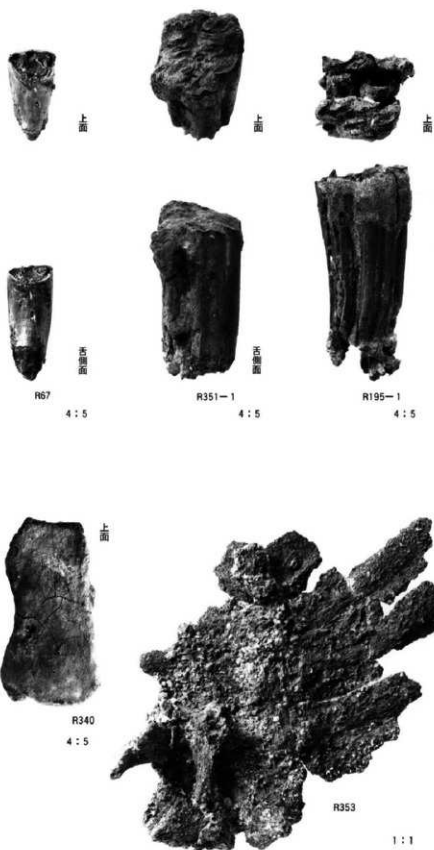
1 : 3



R432-1
上面

1 : 2

ウシ頭蓋骨R352-1 ウシ右下顎骨R432-1



ウマ右上顎第1または第2大臼歯(R195-1) ウマ右上顎第2大臼歯(R351-1)
ウマ右上顎第1切歯(R67) ウマ基節骨(R340) スッポン(R353)

大阪市平野区 長原遺跡東部地区発掘調査報告 X

ISBN 978-4-900687-99-8

2007年3月30日 発行©

編集・発行 財団法人 大阪市文化財協会

〒540-0006 大阪市中央区法円坂1-1-35

<http://www.occpa.or.jp/>

(TEL.06-6943-6833 FAX.06-6920-2272)

印刷・製本 ヨシダ印刷株式会社 大阪営業所

〒532-0003 大阪市淀川区宮原5-1-18

**Archaeological Report
of the
Eastern Sector of Nagahara Site
in Osaka, Japan**

Volume X

**A Report of Excavation
Prior to the Development of the Eastern Sector of the Nagayoshi Area
in fiscal 2004**

March 2007

Osaka City Cultural Properties Association

**Archaeological Report
of the
Eastern Sector of Nagahara Site
in Osaka, Japan**

Volume X

A Report of Excavation
Prior to the Development of the Eastern Sector of the Nagayoshi Area
in fiscal 2004

March 2007

Osaka City Cultural Properties Association